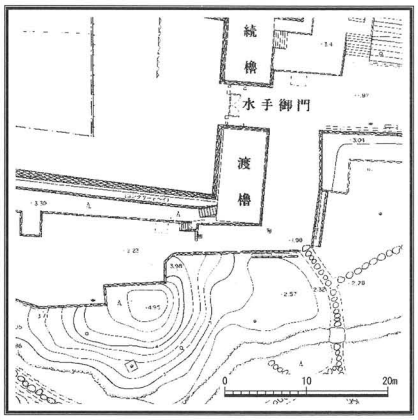
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の旧海面外壁石垣で渡櫓の西面を構成する。 ・高さは中央部で約3.2m、全長は天端で約11.6mである。 ・勾配は79度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また、隅角石にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形のものが多く、規模は大ぶりなものが多いが、標準的なものも見られる。 ・左隅角は完成度の高い算木積であるが、右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4002	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	石段(後世のもの)				石積工法			
方　位	西				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	-				石材		凝灰岩	
転用石	無				刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s1							a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	0.96	-	-	-	1.55	-	-	-	-	83

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

段石は90cm×20cm×20cmと小さい柱状の石材を用いる。側面は布積となる。

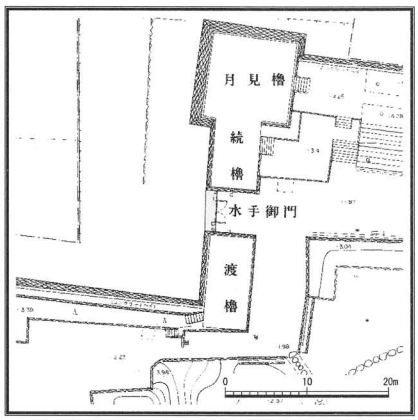
備　考	雁木10段	調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の渡櫓に上る雁木である。 ・最上段での幅員は約1mである。
積み方石材等	・90cm×20cm×20cmの柱状の凝灰岩の切石を用いた雁木である。側面は布積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された雁木である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4003	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		切石	石垣位置
石垣部位	雁木				石積工法			
方　位	西				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	－				石材		花崗岩	
転用石	無				刻　印		無	

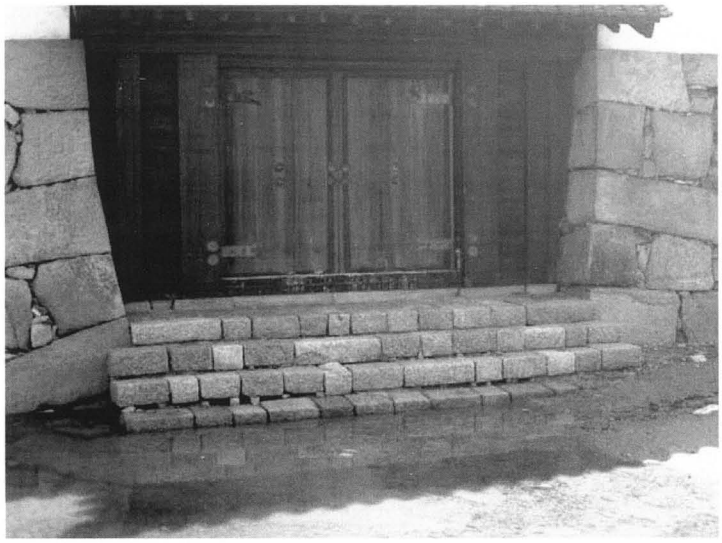


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	－	5.31	－	－	－	－	－	－	－	－

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修		基底部	地山
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



方形の板石を用いる

※平成10年度整備

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

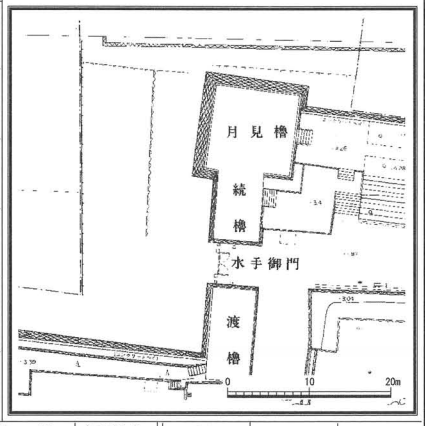
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸水手御門西側に所在し、旧海面へ下る雁木である。 ・現状の幅員は基底部で約5.3mである。
積み方石材等	・花崗岩の切石を用いた雁木であるが、発掘調査で当初の雁木木材と考えられる花崗岩の野面石、割石を検出している。 ・石材は方形で、規模は小ぶりのもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・発掘調査により、雁木の痕跡が検出されており、北ノ丸の新造に伴い築造されたと考えられる。 ・明治34～37年の海面埋め立てに伴い、撤去されたと考えられる。 ・現在の雁木は平成10年度に復元したものである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4004	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	西				角石(算木)	左	
角の形状	左隅角	入				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	続櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.03	7.77	3.68	3.72	4.44	68	74	75	80	77

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査	『高松市文化財調査報告書　史跡高松城』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

円形の石に合わせて角石を石材加工

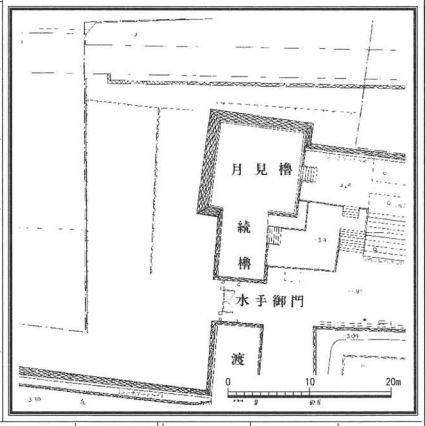
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の旧海面外壁石垣で続櫓台の西面を構成する。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約8.0mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。右隅角石にはノミ仕上げが見られ、加工精度を上げている。 ・石材は角張った方形のものが多いが扁平なものも見られる。規模は標準的なものが多いがやや大ぶりのものも混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4005	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		布積	
方　位	南				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記		ソリ	
上部構造物	月見櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

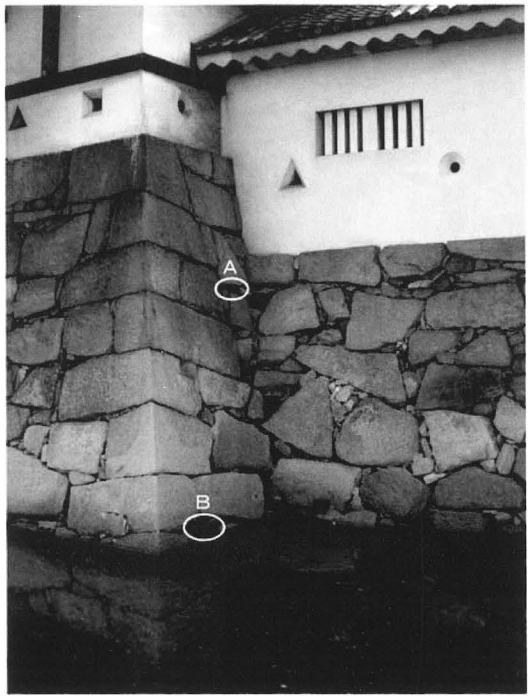


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s23			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.5	2.63	5.17	-	-	66	73	-	75	68

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．間詰石のワレ
※角石ノミ跡あり、大石使用

備　考	短い石垣のため中央高・右端高・中央勾配計測省略	調査年月日	平成16年12月 8日

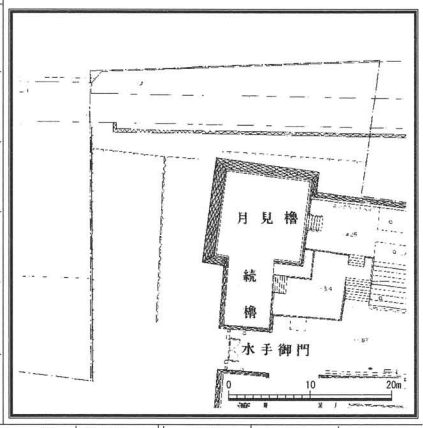
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の旧海面外壁石垣で、月見櫓台の南面を構成する。 ・高さは左端で約5.2m、全長は天端で約1.5mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。左隅角石にはノミ仕上げが見られ、加工精度を上げている。 ・石材は整形された方形のものが多く、規模は大石材を用いている。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4006	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	西				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	月見櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

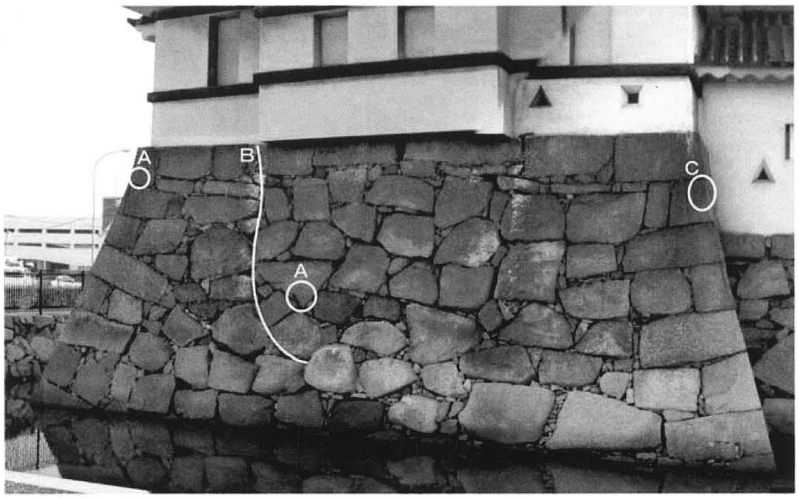


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s24							a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.46	13.53	5.13	4.96	5.23	66	74	74	73	66

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ワレ
B．目地
C．小ワレ
※間詰に後世の詰め物あり。ノミ仕上げの石材多い。

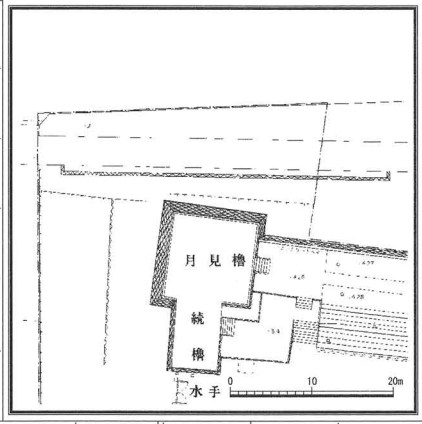
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の旧海面外壁石垣で、月見櫓台の西面を構成する。 ・高さは中央部で約5m、全長は天端で約10.5mである。 ・勾配は74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られ、加工精度を上げている。面を揃えた丁寧な積み方である。 ・石材は方形のものが多く、規模は大ぶりのものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4007	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	月見櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

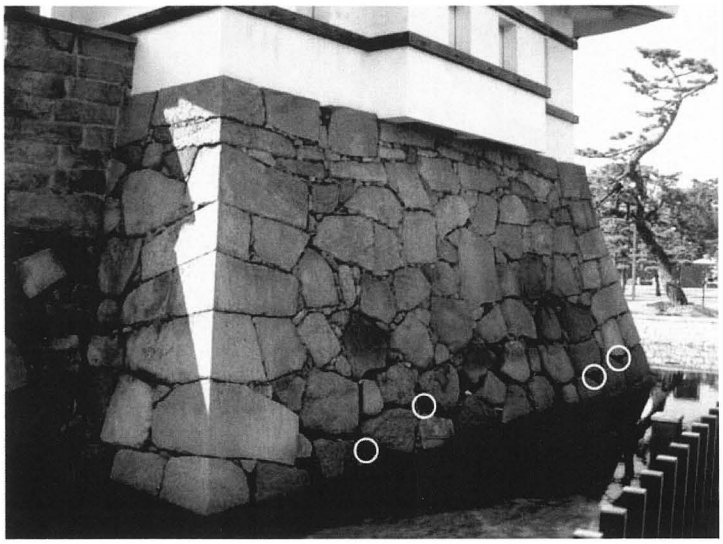


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.03	13.49	5.16	5.11	5.08	68	75	73	72	66

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ
※石垣全体が内にゆるくカーブしている

備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

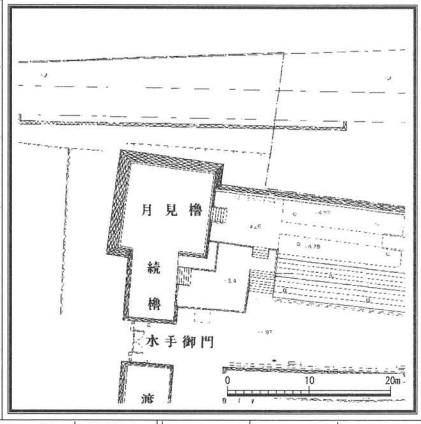
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の旧海面外壁石垣で、月見櫓台の北面を構成する。 ・高さは中央部で約5.1m、全長は天端で約10mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られ、加工精度を上げている。面を揃えた丁寧な積み方である。 ・石材は方形のものが多く、規模は大ぶりのものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4008	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	東				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	月見櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

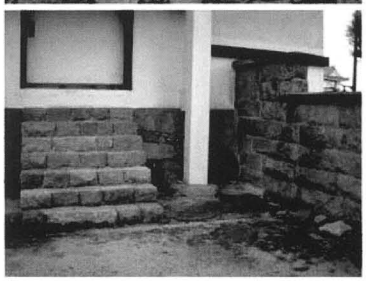


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好				s3							a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	2.05	2.45	5.12	-	5.11	64	71	-	73	68
	左	4.46/2.43	7.29	1.66	1.62/1.44	1.41	80	80	84	82	-

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



ワレ

備　考	短い石垣のため中央高省略、雁木で中央勾配計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

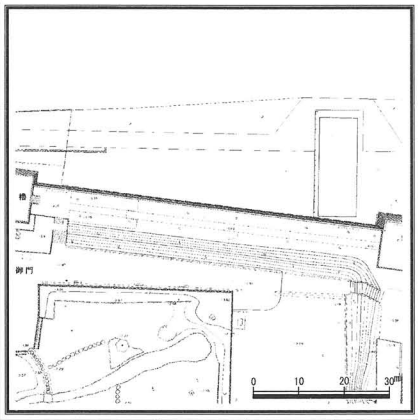
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸西部の月見櫓台の東面石垣である。東西に延びる旧海面外壁№4009石垣によって、城郭内外に画されており、右半は旧海面外壁にあたる。 ・高さは左(城内)側で約1.6m、右(城外)側で約5.1mである。全長は天端で約8.9mである。 ・勾配は左側で84度とやや急であるが、右側で73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られ、加工精度を上げている。面を揃えた丁寧な積み方である。中央部に月見櫓へ上る石段が設けられている。 ・石材は方形のものが多く、規模も大ぶりのものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材のワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4009	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

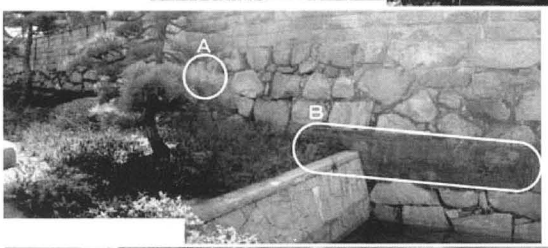


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2						s2		有	a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	75.24	74.68	2.01	2.05/4.05	3.86	75	77	84	78	64

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ズレ落ち、ワレ
B．コンクリートの残り

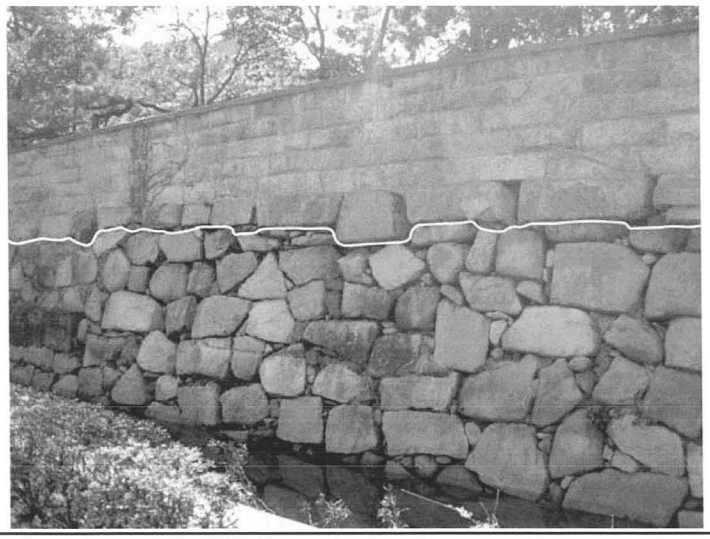
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北部の旧海面外壁石垣で月見櫓と鹿櫓をつなぐ多聞櫓台北面石垣である。前面は歩道に沿う緑地が整備され、その間に水辺空間が作られている。 ・高さは中央部で約4.1m、全長は天端で約75.2mである。 ・勾配は77～84度と場所によって変化するが、概ね平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。石垣面は面を揃えた丁寧な積み方である。 ・石材は方形のものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中段で、間詰石のヌケとその周辺の石材のズレが見られる。 ・石垣前面下部が埋め立てられた時に、石垣前面には緩衝材のゴムが当てられてコンクリートが打たれている。 ・石垣上の石塀は、歴史的景観にそぐわないものとなっている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

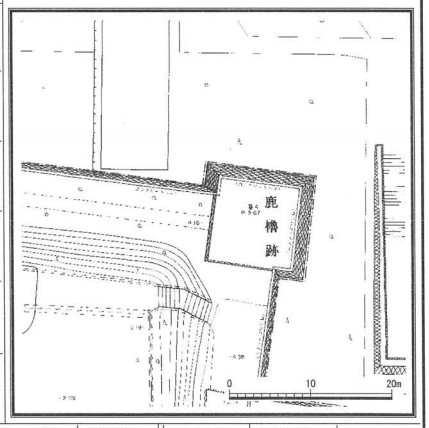
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
笠石下の目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	笠石の積み上げ
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4010	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	鹿櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

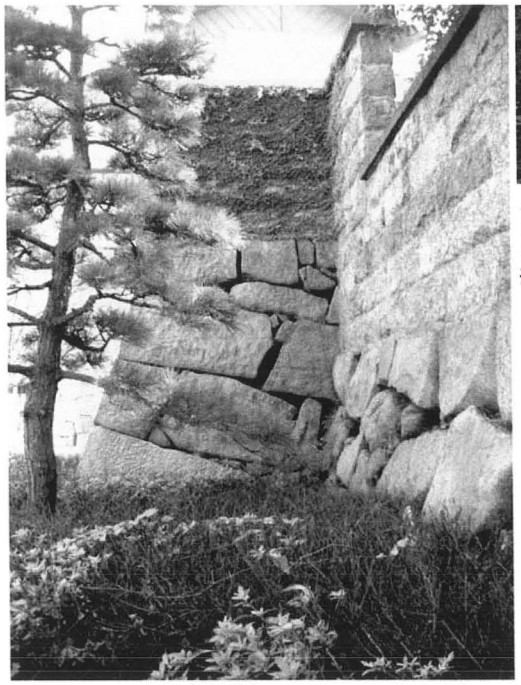


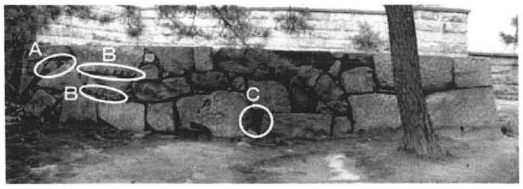
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2		有	a3	b1	D

石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	8.32	8.32	-	1.47	1.27	-	81	82	82	78
	左	2	2.2	3.36	-	-	66	74	-	74	75

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．間詰石ゆるくて動く
B．矢穴
C．間詰石のヌケ
※城内側は石材不揃い（大小、方形丸み）

備　考	短い石垣のため左端高・左角勾配省略	調査年月日	平成16年12月 9日

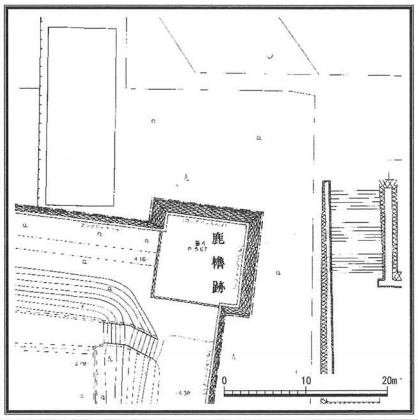
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の鹿櫓の西面石垣である。№4009石垣によって城郭内外に画されており、左半は旧海面外壁石垣にあたる。 ・高さは右(城内)側で約1.5m、左(城外)側で約3.4mである。全長は天端で約10.3mである。 ・勾配は右側で82度とやや急であるが、左側が74度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。石垣面は面を揃えた丁寧な積み方である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形のものが多い。規模は右側で小ぶりのものが多く見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣中段で間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。 ・石垣上の石塀は、歴史的景観にそぐわないものとなっている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4011	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	北				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	鹿櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

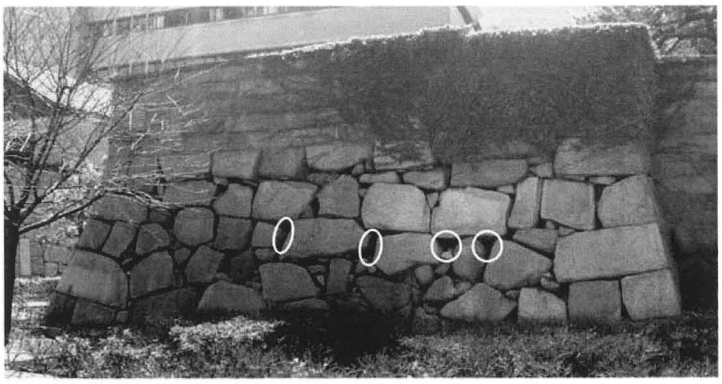


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2		有	a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.82	12.61	3.8	3.68	3.73	70	74	73	74	66

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



間詰石のヌケ

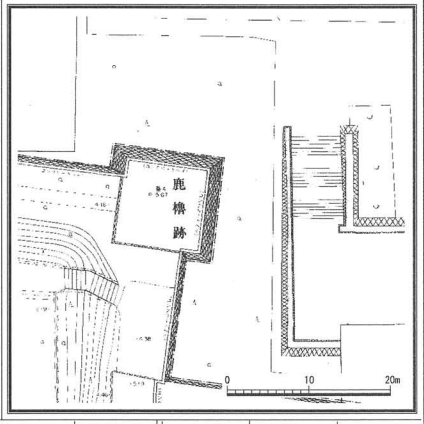
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の旧海面外壁石垣で鹿櫓台の北面を構成する。歩道沿いの緑地に面し、その間に水辺が整備されている。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約10.8mである。 ・勾配は73度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。石垣面は面を揃えた丁寧な積み方である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形のものが多い。規模は標準的なものが多いが、小ぶりのものも混在する。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。 ・石垣上の石塀は、歴史的景観にそぐわないものとなっている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4012	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	鹿櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2		有	a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	10.68	12.66	3.86	3.84	3.19	75	75	75	73	70

築造時期	新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A. 矢穴
B. 間詰石のヌケ
C. 間詰石ズレ
D. ややソリ

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

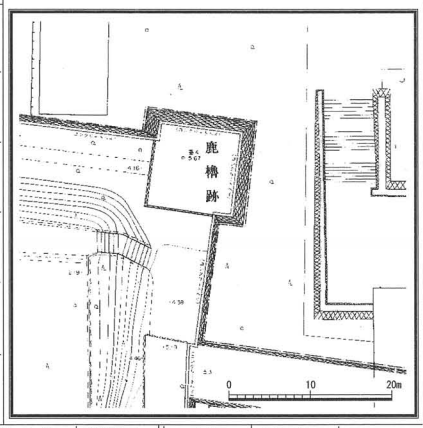
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の旧海面外壁石垣で、鹿櫓台の東面を構成する。 ・高さは中央部で約3.8m、全長は天端で約10.7mである。 ・勾配は75度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。石垣面は面を揃えた丁寧な積み方である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形のものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケが見られるが、良好な状態である。 ・石垣上の石塀は、歴史的景観にそぐわないものとなっている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4013	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法		乱積
方　位	南				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	鹿櫓				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

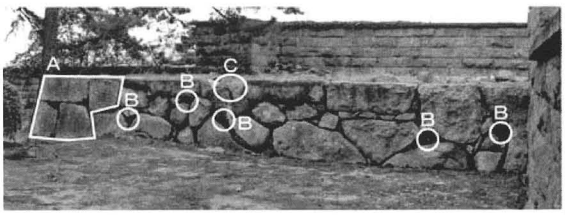


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1			s4				s2		有	a2	b1	D

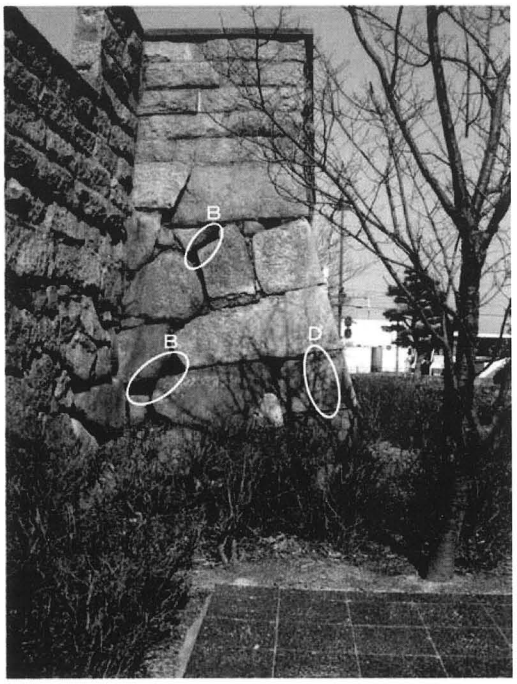
石垣規模		天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	右	2.09	3	3.32	-	3.94	78	76	-	74	75
	左	8.25	8.5	1.28	1.11	-	78	80	82	84	-

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．ノミ跡
B．間詰石ヌケ
C．一石欠け
D．ワレ



備　考	短い石垣のため中央高・中央勾配省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

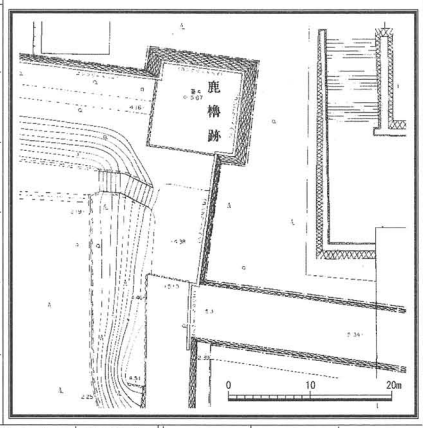
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の鹿櫓の南面石垣である。南へ続く№4014石垣によって、城郭内外に画されており、右半は旧海面外壁石垣にあたる。 ・高さは左(城内)側で約1.1m、右(城外)側で約3.9mである。全長は天端で約10.3mである。 ・勾配は左側で82度、右側で76度であり、城外側の勾配がやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。また隅角石にはノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形のものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っているが、城内側では小ぶりのものが多い。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端石に欠損が見られる。また、隅角石にワレが見られる。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4014	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石
石垣部位	外(海に面する)				石積工法	乱積
方　位	東				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	
	右隅角	入			その他特記	
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2						s2		有	a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	15.65	14.45	2.73	2.59	2.45	78	85	82	79	78

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石のヌケ
※一石下へズリ落ち

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

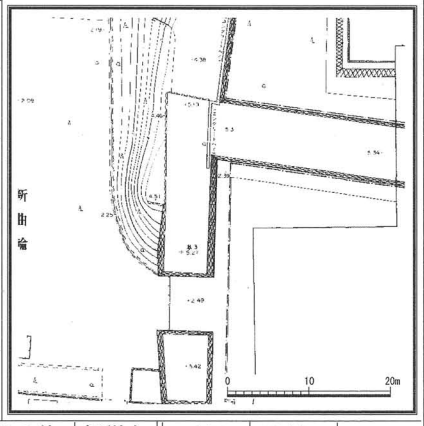
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の旧海面外壁石垣で、多聞櫓台の東面石垣である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約15.7mである。 ・勾配は82度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石垣中段に石材のズレが見られる。間詰石のヌケも見られる。 ・石垣上の石塀は、歴史的景観にそぐわないものとなっている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4015	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	その他(北ノ丸区画)				石積工法		布積
方　位	東				角石(算木)	左	割石
角の形状	左隅角	出				右	
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置

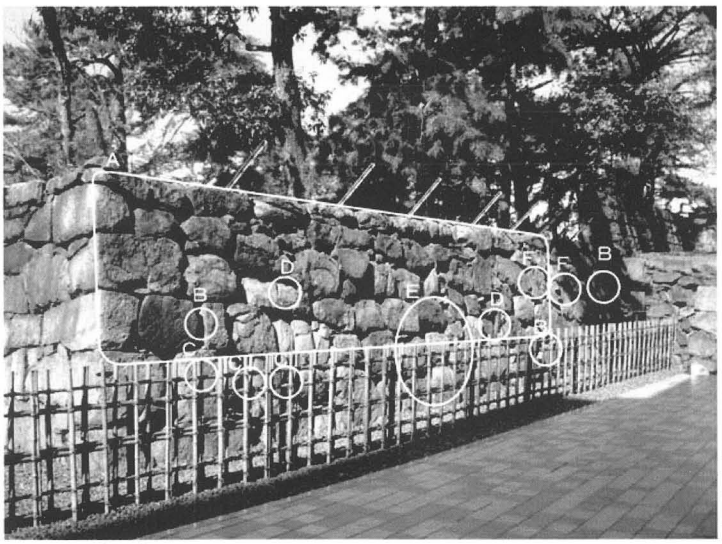


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2	n2				s2	r123		a2	b1	B

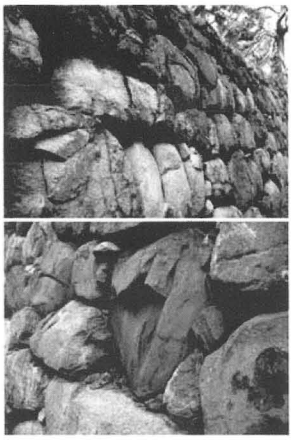
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	14.96	14.47	2.86	2.75	2.8	77	78	76	81	82

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．一面焼け跡
B．間詰石のヌケ
C．ワレ
D．ワレ落ちそうな箇所
E．小ハラミ
F．モルタル目地



石材ワレ状況

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

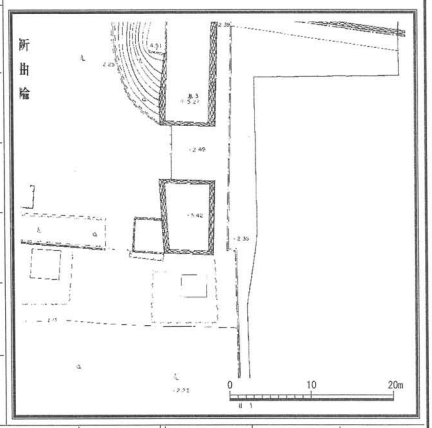
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東側で北ノ丸と東ノ丸を画する東面石垣である。 ・高さは中央部で約2.8m、全長は天端で約15.0mである。 ・勾配は76度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角付近にはノミ仕上げが見られる。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で角が取れた丸みのあるものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・焼損が広く見られ、石材面のワレも多く見られる。 ・中段部に薄いハラミが見られる。 ・目地にモルタルを詰めて補強している。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中段から下部に通る横目地	中段から下部	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4016	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他(北ノ丸区画)				石積工法		布積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

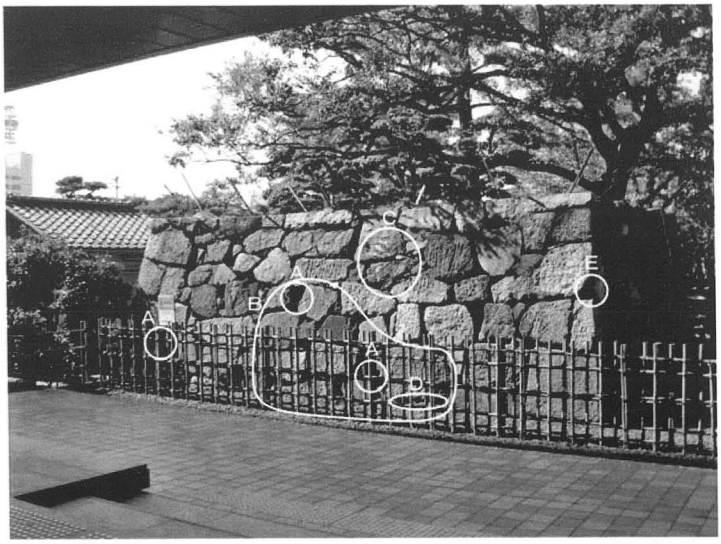


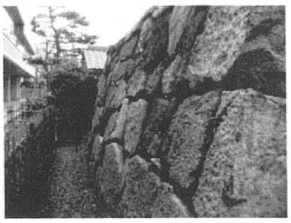
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2	s1	n4			a2	r123		a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.23	9.17	2.95	2.79	2.88	73	73	71	77	77

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．間詰石のヌケ
B．小ハラミ
C．焼け跡
D．矢穴
E．ワレ落ち（欠けている）
※ノミ跡多い

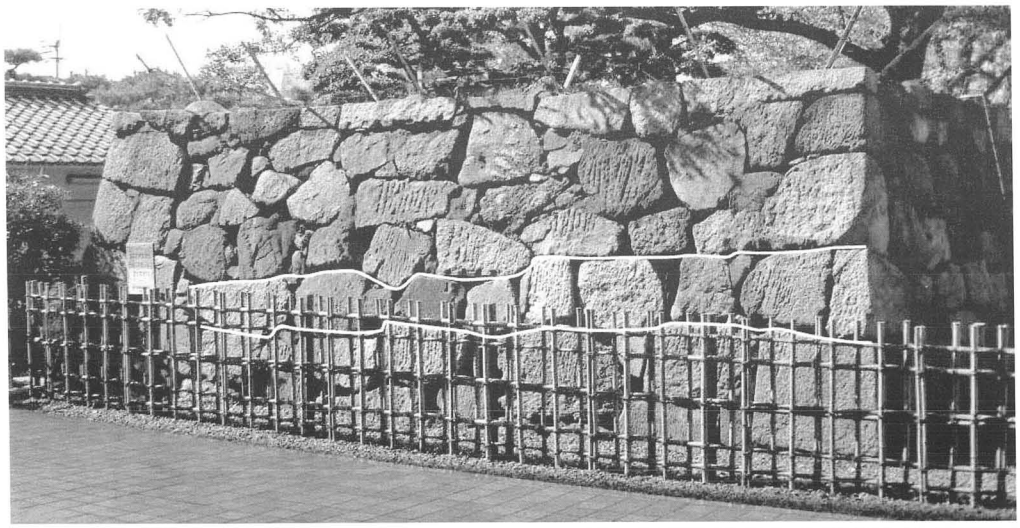
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東南隅で北ノ丸と東ノ丸を画する東面石垣である。 ・高さは中央部で約2.8m、全長は天端で約8.2mである。 ・勾配は71度と緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積であるが、上半は乱積に近い。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。全面にノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・焼損が右半中央に見られる。石材のワレや剥離も見られる。 ・中段部に薄いハラミが見られる。 ・目地にモルタルを詰めて補強している。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

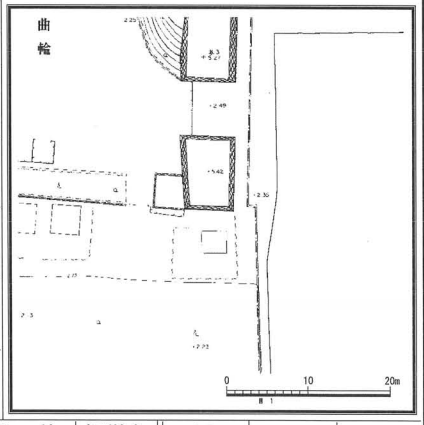
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣中段から下部に通る横目地	中段から下部	花崗岩	方形割石角張る	ほぼ同規模	割石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4017	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	多聞櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

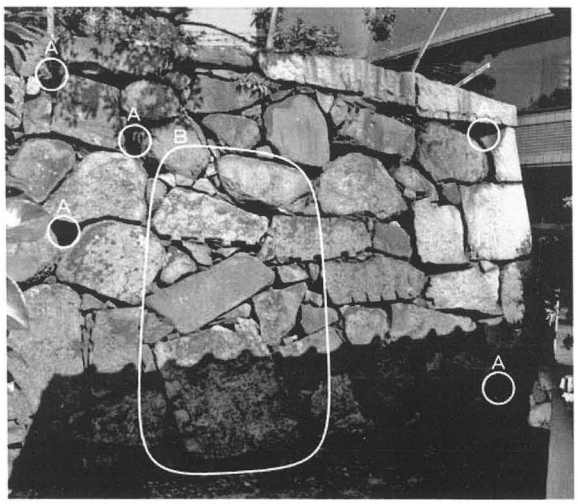


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s123			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.45	6.73	3.27	2.99	3.05	71	80	76	79	73

築造時期	新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



A．間詰石のヌケ
B．石材の方向がばらつく

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

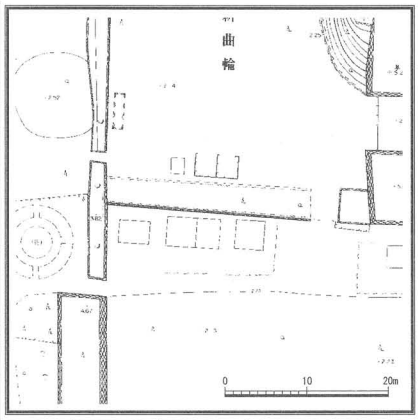
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東南隅の南面石垣で、埋め立てられた中堀に面する。 ・高さは中央部で約3.0mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約5.5mであるが、本来は埋め立てられた中堀に面する石垣が左側に続くと考えられる。 ・勾配は76度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角張ったものが多く、規模もほぼ揃っているが大石材も見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・間詰石のヌケは見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4018	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法	乱積
方　位	南				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	算木にならない
	右隅角	出			その他特記	
上部構造物	塀				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

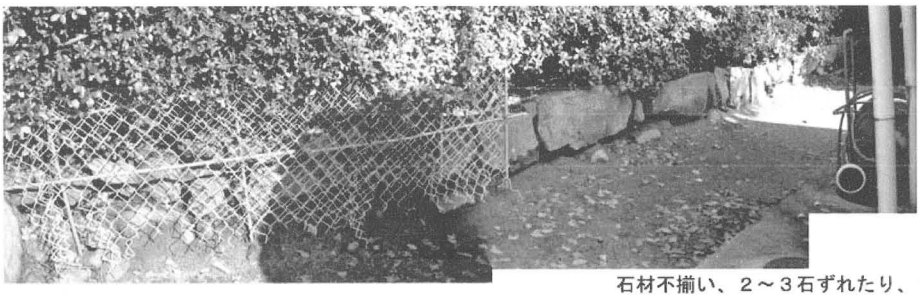


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好	s1	s2									a3	b3	D

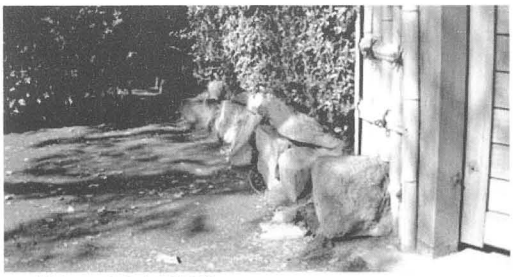
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	27.5	27.5	0.51	0.46	0.45	-	77	77	83	-

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

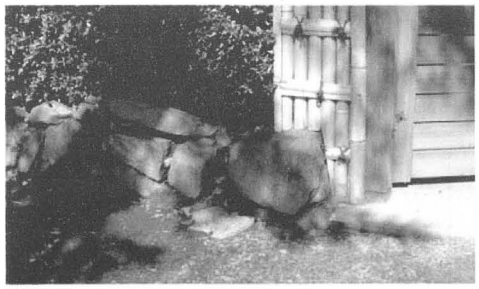
破損現状



石材不揃い、２～３石ずれたり、１石欠けている



※かつての中堀石垣

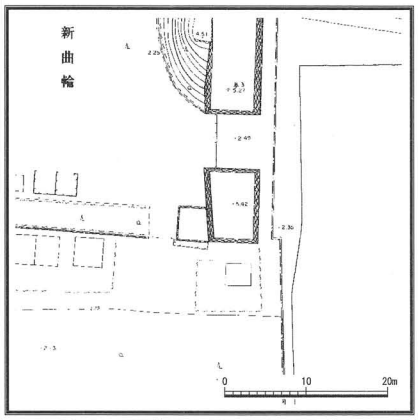


備　考	左角勾配・右角勾配一石のみのため計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸南端の南面石垣で、埋め立てられた中堀に面する。 ・高さは中央部で約0.5mであるが、下部は埋め立てられており、本来はもっと高い石垣である。全長は天端で約27.5mであるが、本来はさらに右側に延び№4017石垣と連続する石垣と考えられる。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は入隅、右隅角はすり付けとなっている。 ・現状は縁石状の石垣である。 ・石材は方形で角張ったものや丸みのあるもの等混在する。規模も大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・石材の欠損やズレが見られる。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣と考えられる。 ・現在の石垣は明治以降に積まれた可能性が高いと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4019	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			n1						s1			a2	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.17	-	3.17	-	3.27	75	79	-	80	71

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．間詰石のヌケ
B．少しズレ出し

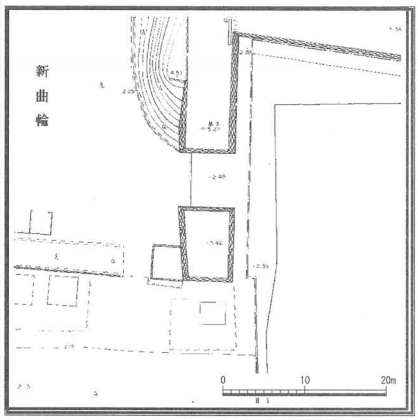
備　考	中央勾配測定不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸南東端の西面内石垣である。 ・高さは中央部で約3.2m、全長は天端で約8.2mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角張ったものが多いがやや扁平のもの、丸みのあるもの等混在する。規模も標準的なものでほぼ揃っているが大石材や小石材も用いられている。矢穴のある石材が目立つ。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・天端石にズレが見られる。また、間詰石のヌケも見られる。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4020	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		布積	
方　位	北				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	黒門				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

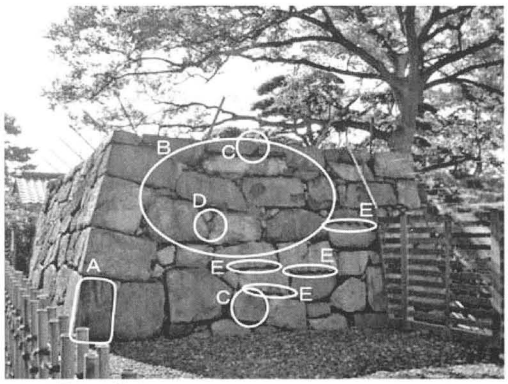


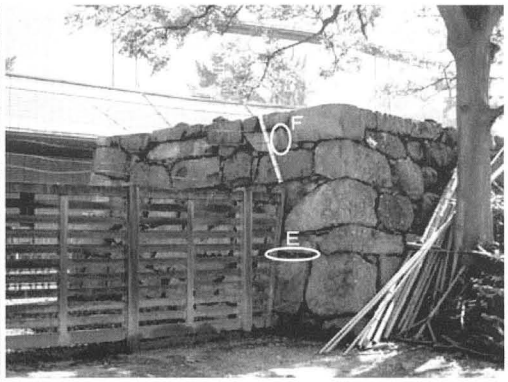
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s13							r12	有	a2	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.52	6.79	2.91	2.93	3.18	77	82	78	80	75

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．縦石に使う
B．焼け
C．間詰石のズレ
D．ズレ出し
E．矢穴
F．モルタル目地

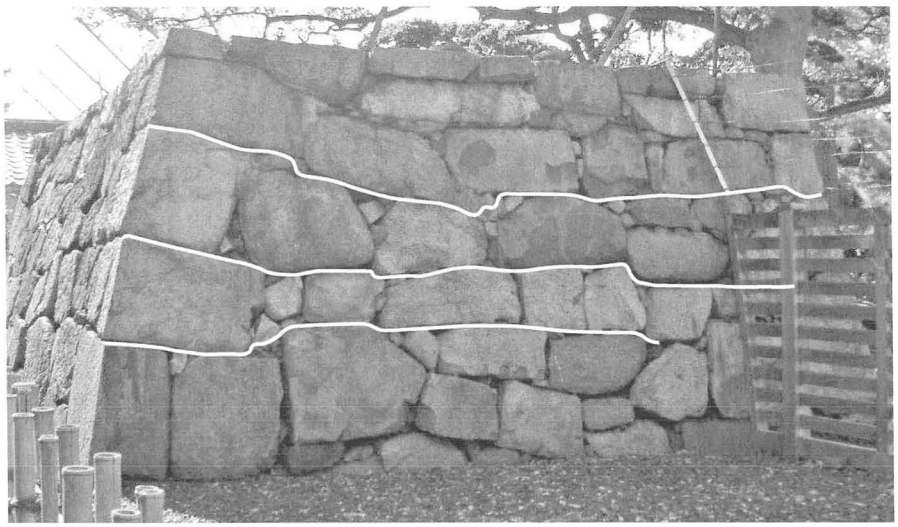
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸南東端の黒門南側石垣である。 ・高さは中央部で約2.9m、全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は78度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形で角張ったものが多いが、やや丸みのあるもの等混在する。規模は標準的なものでほぼ揃っているが小ぶりなものも見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・天端石や石垣下部の石材にズレが見られる。 ・ほぼ全面にわたり焼損を受けている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

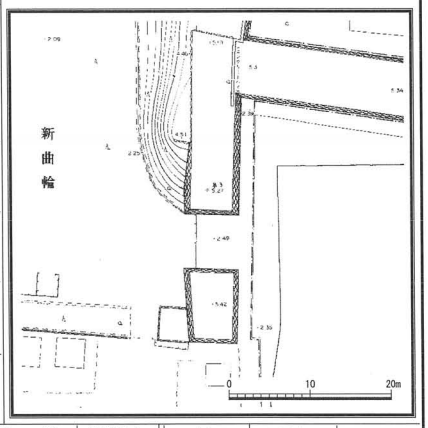
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
石垣全面に通る横目地	全面	花崗岩	方形割石角張る	大小混在	割石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4021	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	黒門				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

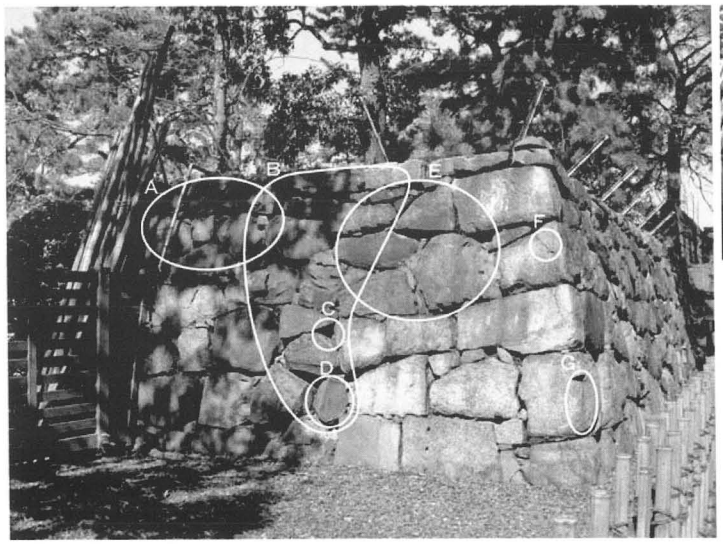


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					s4	n14				r1		a2	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.51	6.86	3.16	2.87	2.88	74	82	81	83	77

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．焼けヒビ
B．安山岩
C．間詰石のヌケ
D．ワレ落ち
E．焼け
F．ヒビ
G．角がワレ落ち

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

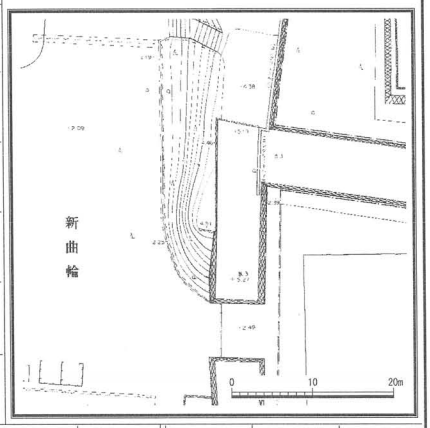
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸南東端の黒門北側石垣である。 ・高さは中央部で約2.9m、全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は81度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積であるが、右側では布積になっている。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。 ・石材は方形でやや丸みのあるものが多いが、角張ったものも右側に多く見られる。規模は標準的なものでほぼ揃っているが小ぶりのものも見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・上段の石材にワレが見られ、また左隅角近くの石材に剥離が見られる。 ・ほぼ全面にわたり焼損を受けている。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
中央より右側の石垣面に通る横目地	右側石垣面	花崗岩	方形割石角張る	大小混在	割石布積	布積
中央天端から下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	工法の違い
	右側	花崗岩	方形割石角張る		割石布積	

史跡高松城跡　石垣調査

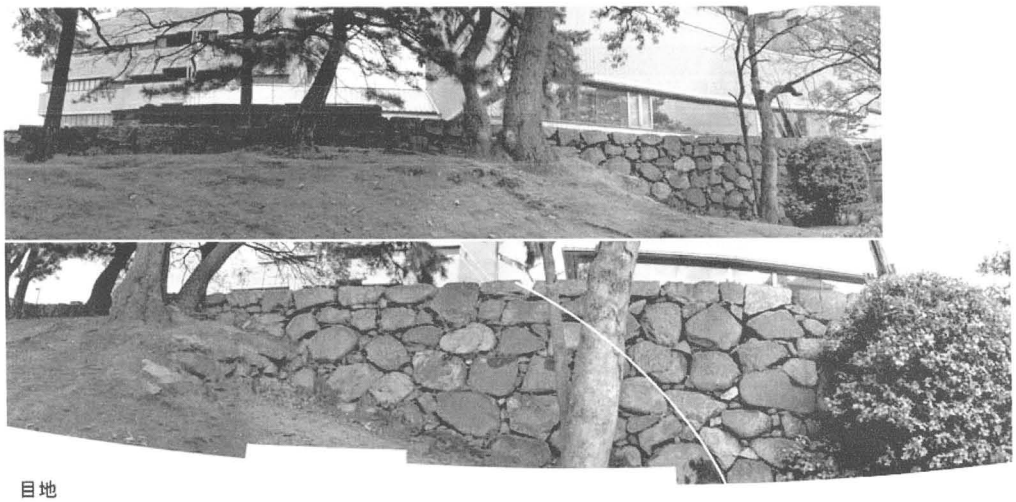
石垣番号	4022	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石、野面	石垣位置
石垣部位	内(多聞櫓台)				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	算木にならない	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	22.15	-	0.73	0.71	3.1	85/-	-1/82	73/78	82/76	-/74

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



目地

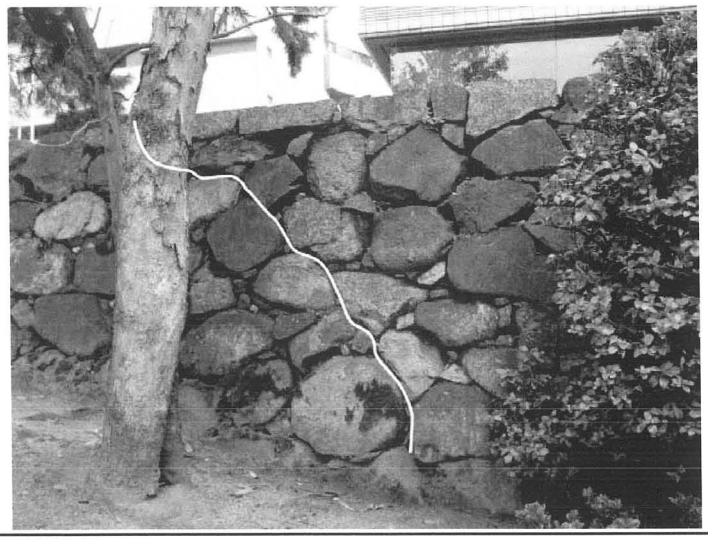
備　考	右角勾配なし一続き	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

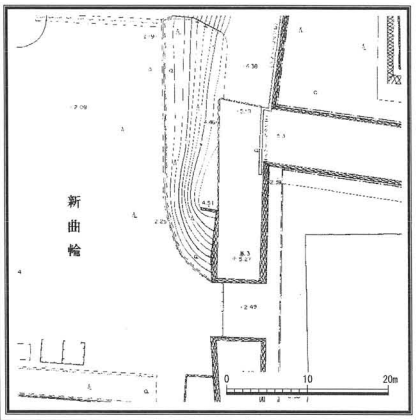
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東側の西面内石垣である。 ・高さは左端で約0.7m、右端で約3.1mである。全長は天端で約22.2mである。 ・勾配は73～78度で変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられている。右半は面を揃えて丁寧に積まれているが、左半は上段が大石材、下段は小石材を使用して積まれており、石垣としてはやや安定感に欠ける。 ・石材は方形でやや丸みのあるもの、角張ったものが見られ、規模は標準的なものでほぼ揃っているが、やや大ぶりのものが左側に見られる。 ・右隅角は完成度の高い算木積であるが、左隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
中央天端から右下がりに下部に至る縦目地	左側	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	右側石垣の積み直しか築造時のもの
	右側	花崗岩	方形割石丸み		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4023	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	野面、割石	石垣位置
石垣部位	内				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.15	2.24	0.18	0.59	0.65	-	88	-	87	-

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

階段側面（南面）の石垣か？

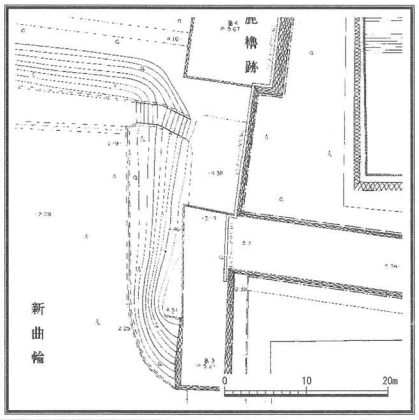
備　考	左角勾配・右角勾配・中央勾配省略	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東側の多聞櫓台から西へ張り出した小石垣である。 ・高さは中央部で約0.6m、全長は天端で約1.2mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石及び割石を用いた乱積と考えられるが、土中に埋没している部分が多く、詳細は不明である。右隅角は入隅、左隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は方形でやや角張っており、規模はやや小ぶりなものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・本来の石垣の状態ではないと考えられるが、大半が埋没しており、詳細は不明である。
石垣の変遷	・北ノ丸の新造に伴い築造された石垣である。 ・『旧高松御城全図』によると、本石垣及び本石垣からさらに北へ延びる石垣が描かれている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4024	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	その他(後世のもの)				石積工法		布積	
方　位	北				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右	算木にならない	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	多聞櫓				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			無	

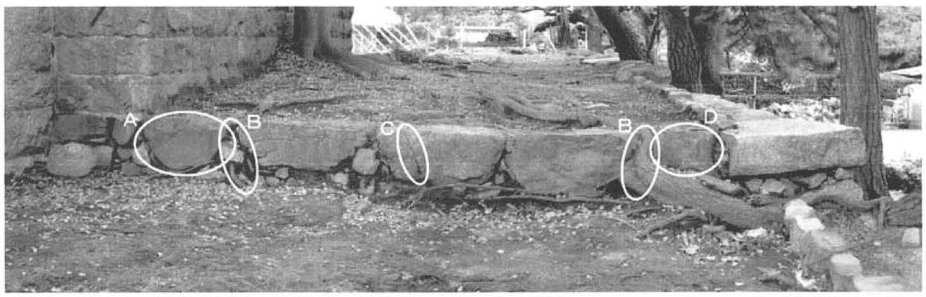


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			t1		s1							a2	b3	C

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.24	6.24	0.35	0.46	0.54	-	80	86	86	85

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A. 安山岩
B. 木の根が入り込む
C. ワレ
D. 少しズレ

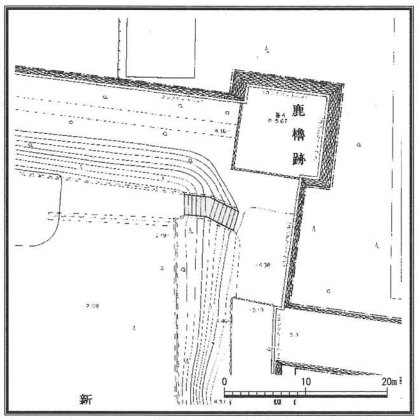
備　考	左角勾配一石のため測定不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東側の櫓台北面石垣である。 ・高さは中央部で約0.5m、全長は天端で約6.2mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた布積である。石列状である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角はコンクリート塀に対して入隅となっている。 ・石材は方形でやや角張っており、規模は標準的なもので揃っている。 ・右隅角は算木積になっていない。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・木の根による石材のズレが見られる。ワレも見られる。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4025	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	西				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.4	－	－	－	－	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修	新規	基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

右へゆるやかにカーブする
踏面幅が広い（65cm）

※後世のものと思われる

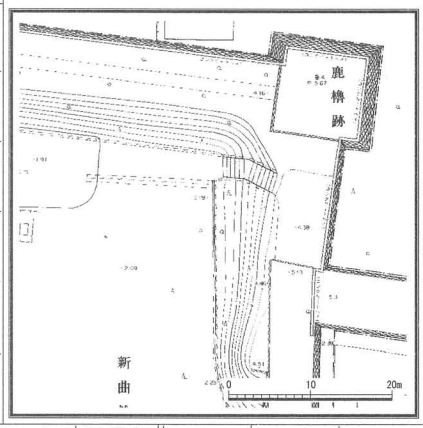
備　考	雁木11段	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸東側の多聞櫓台へ上る石段である。 ・最上段の幅員は約2.4mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。上段に向かって右側に緩くカーブする。長い切石を側石とし、踏面の中に角張った石材を2列ほど配置する。 ・石材は方形で、整形されており、規模は揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造された石段と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4026	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	野面	石垣位置
石垣部位	その他（不明）				石積工法		
方　位	西				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	すりつけ			角石（算木） 右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	13.36	13.36	0.18	0	0.2	－	－	－	－	－

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

３石のみ

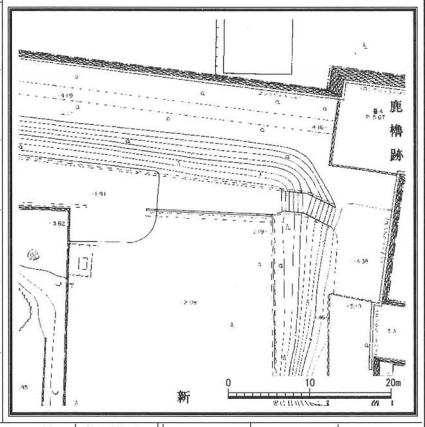
備　考	石垣の残りが悪いため測定不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北東部の西面石垣である。現状では3石のみである。 ・高さは約0.2m、全長は天端で約13.4mである。 ・勾配は測定不可能である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた石列状である。 ・石材は丸みがある方形で、規模は標準的なもので揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造された石垣と考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4027	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（不明）				石積工法		
方　位	北				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	?			角石（算木）右		
	右隅角	?			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無（近隣石材に○、×）	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	17.05	-	-	-	-	-	-	-	-	-

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修		基底部	
修　理		文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

刻印×○
※上面だけみえる状態で埋没

備　考	上面の一石のみ見える石垣のため計測不可	調査年月日	平成16年12月 9日

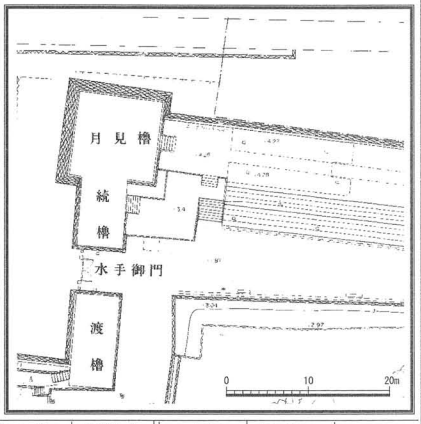
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は、北ノ丸北東部の西面土留め石垣から西に続く石列である。 ・全長は約17.1mである。 ・勾配は測定不可能である。
積み方石材等	・ほとんど埋没しており、石材の上面だけが見える状態であり、詳細は不明である。 ・石材は花崗岩の割石と考えられる。 ・転用石は見られない。 ・石列の北側に○・×の刻印が見られる石材がある。 ・目地は見られない。
破損状況	・詳細は不明である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』には、同位置に何らかの施設が描かれており、新郭造築期に築造された可能性が考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4028	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	切石
石垣部位	石段(後世のもの)				石積工法	
方　位	南				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	
	右隅角	入			その他特記	
上部構造物	-				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.06	3.09	-	-	-	-	-	-	-	-

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

安山岩
※踏面幅60cm、加工度がまちまちな石材が多い

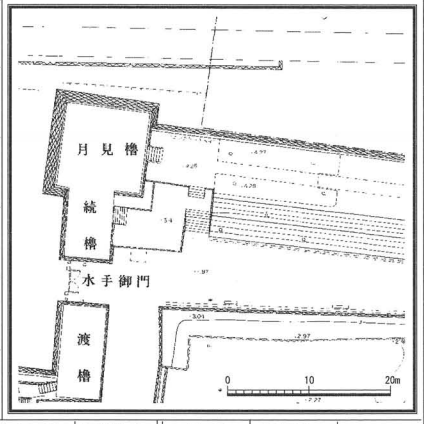
備　考	雁木５段	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の多聞櫓に上る石段である。 ・最上段の幅員は約3.1mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。 ・石材は方形で、規模は大小混在する。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。同位置に南西から北東方向に斜めに上る雁木が描かれており、昭和30～32年の調査において遺構も検出されている。 ・現在の石段は、昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。その際に№4030石垣を新たに設け、№4031石段と2段に分断されている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4029	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石、野面	石垣位置
石垣部位	その他(後世のもの)				石積工法	乱積	
方　位	西				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	すりつけ			その他特記		
上部構造物	犬走り				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.29	5.85	0.92	0.57	0.25	-	89	85	85	-

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

面が不揃い
やや乱雑な積み方

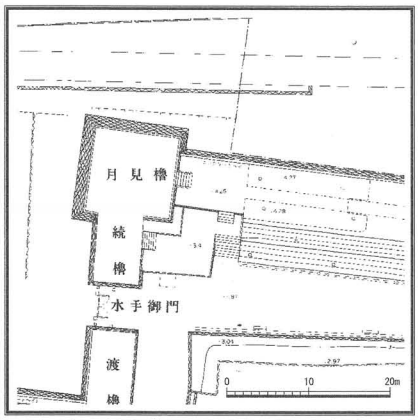
備　考	左角・右角一石のため測定不可	調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の多聞櫓に上る石段の側壁石垣である。 ・高さは最上段部で約0.9m、最下段部で約0.3mである。全長は天端で約6.7mである。 ・勾配は最上段部で89度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。左側では石垣面が不揃いで、乱雑な積み方が見られる。左隅角は入隅、右隅角は地盤にすり付けである。 ・石材は方形のものが多く、規模はやや小ぶりなものでほぼ揃っている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い新設された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4030	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他(後世のもの)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	土留				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

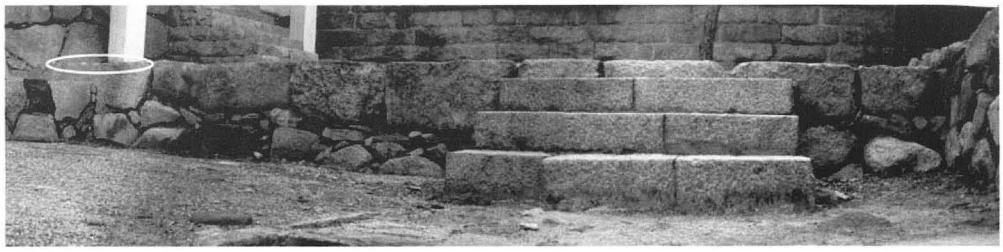


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.15/1.13	5.15/1.13	0.64	0.86	0.76	72/88	72	84	83	85

築造時期	明治以降	改修	基底部
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』
発掘調査	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状



矢穴
※上部の石材が大きく、下部の石材が小さい
面が不揃い

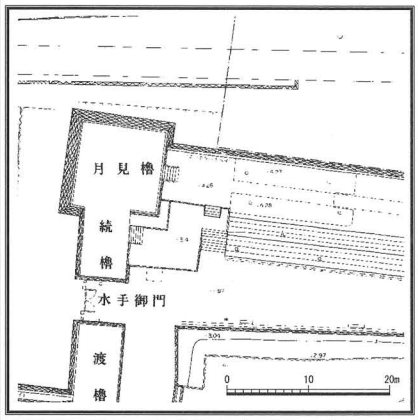
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓から東へ延びる南面石垣である。 ・高さは中央部で約0.9m、全長は天端で約6.3mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は天端が方形のものが多く、規模は標準的なものでほぼ揃っているが、その下部では栗石状の小石材も多く見られる。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い新設された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4031	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2	2	0.64	－	0.64	－	－	－	－	90

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

踏面幅広い（45cm）

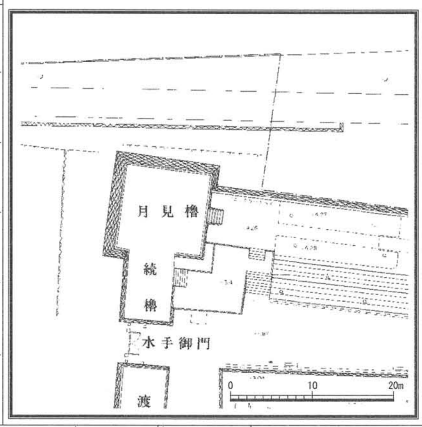
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の多聞櫓に上る石段である。 ・幅員は約2.0mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は布積である。 ・石材は方形の長い切石を用いている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・目立った破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』によると、北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。同位置に南西から北東方向に斜めに上る雁木が描かれており、昭和30～32年の調査において遺構も検出されている。 ・現在の石段は、昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。その際に№4030石垣を新たに設け、№4028石段と2段に分断されている。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4032	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	東				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木） 右		
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

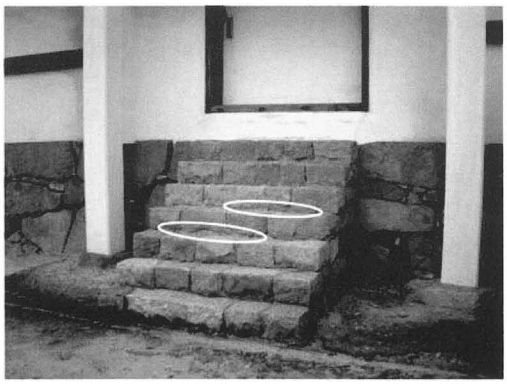


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好										有	a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	1.77	1.78	1.44	-	1.45	-	-	-	-	90

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



目地モルタル詰め
※踏面幅28cm。長方形の柱状石を４～５石づつ積む。側面は布積となる。

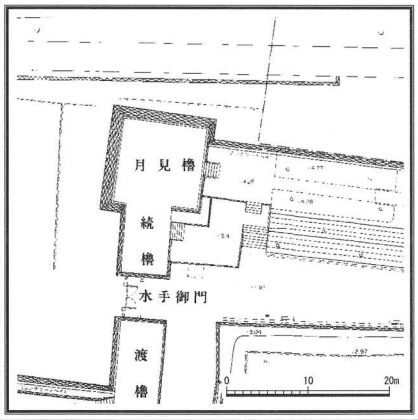
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓に入るための石段である。 ・最上段の幅員は約1.8mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は布積である。 ・石材は方形の短い切石を用いて、1列に4、5石並べている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図等によると、多聞櫓が所在した場所であり、明治以降のものである。 ・現在の石段は、昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4033	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	乱積	
方　位	東				角石（算木）左	切石	
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

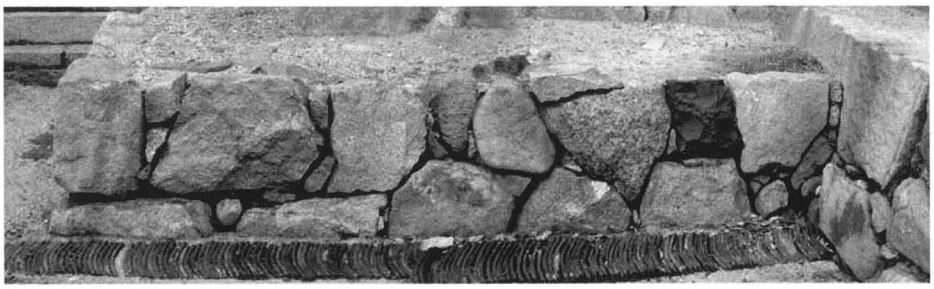


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.43	3.27	0.62	0.63	0.64	80	83	77	79	77

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



※後世のものか？

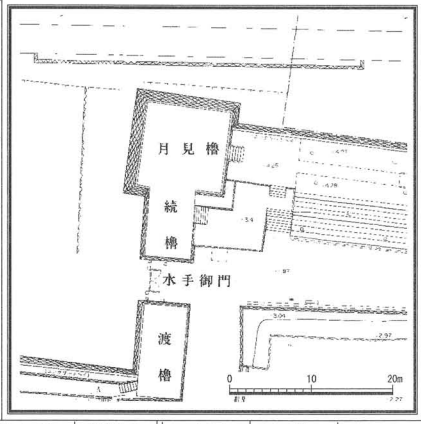
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓台に腰巻状に取りつく東面石垣である。 ・高さは中央部で約0.6m、全長は天端で約3.4mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模はやや小ぶりのものでほぼ揃っている。 ・左隅角は算木積を意識した積み方である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い新設された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4034	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	その他（後世のもの）				石積工法	乱積	
方　位	南				角石（算木） 左		
角の形状	左隅角	入			角石（算木） 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.97	3	0	0.65	0.62	90	87	86	84	80

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

※後世のものか？

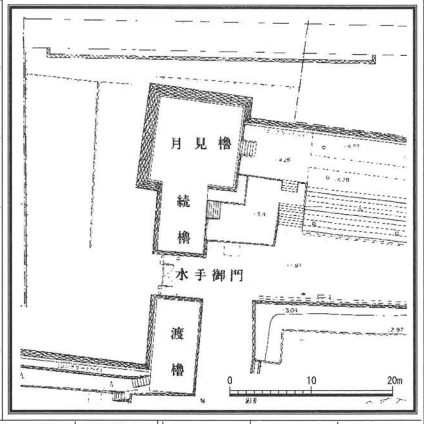
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓台に腰巻状に取りつく南面石垣である。 ・高さは中央部で約0.7m、全長は天端で約4.0mである。 ・勾配は86度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形で、規模はやや小ぶりのものでほぼ揃っている。 ・右隅角は算木積を意識した積み方である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い新設された石垣である。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4035	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	切石	石垣位置
石垣部位	石段（後世のもの）				石積工法		
方　位	東				角石（算木）左		
角の形状	左隅角	出			角石（算木）右		
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	－				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

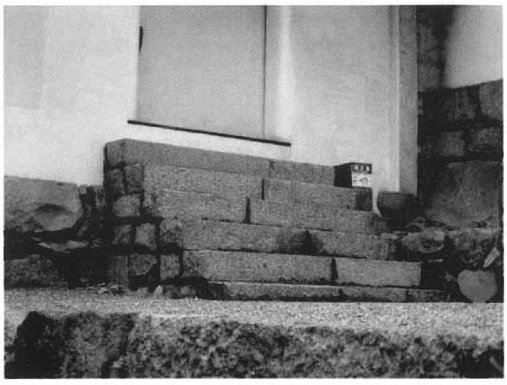


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.31	2.27	1.19	－	0.61	－	－	－	－	90

築造時期	明治以降	改修		基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



長方形の柱状石を２～３石づつ積む。側面は布積となる。
※本来多聞の位置に当たり、後世のものと思われる。

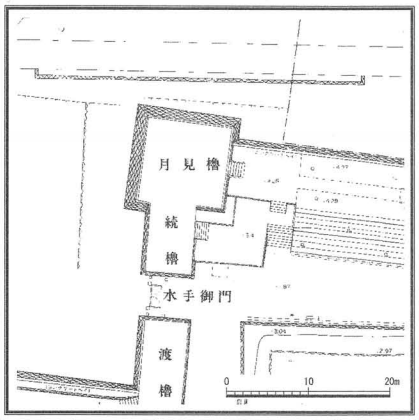
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の続櫓に入るための石段である。 ・最上段の幅員は約2.3mである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の切石を用いた石段である。側面は布積である。 ・石材は方形の長い切石を用いて、1列に2石並べている。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・絵図には描かれておらず、明治以降に築造された石段と考えられる。 ・現在の石段は昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4036	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	布積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記	ソリ	
上部構造物	月見櫓				石材	花崗岩	
転用石	無			刻　印		無	

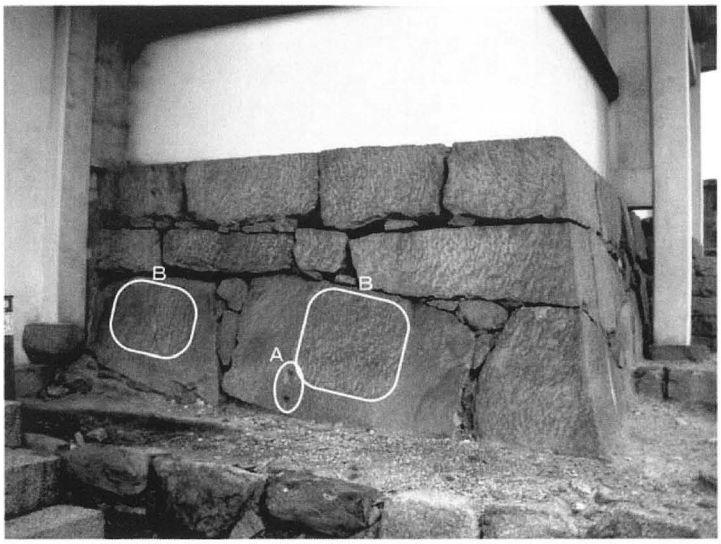


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.24	3.54	1.52	1.59	1.64	84	83	83	82	80

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．矢穴
B．部分的ノミ跡
※ノミ仕上げのもの多い

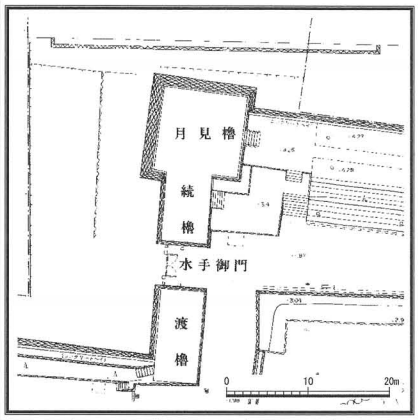
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓台の南面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.6m、全長は天端で約3.2mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。右隅角及び天端では切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。左隅角は建物との入隅である。 ・石材はやや扁平の方形で、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4037	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		布積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記		ソリ	
上部構造物	続櫓				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	4.53	2.35/2.22	2.58	2.52/0.97	0.82	80	81	80	88	84

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

間詰石が並ぶ

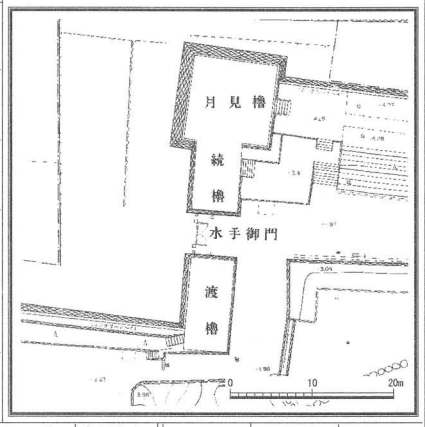
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の続櫓台の東面内石垣である。 ・高さは左側で約2.6m、右側で約0.8mである。全長は天端で約4.5mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた布積である。左隅角及び天端では切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。右隅角は入隅である。 ・石材はやや扁平の方形で、規模は大小混在する。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4038	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記		ソリ	
上部構造物	続櫓、水手御門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								n2			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.49	6.55	2.63	2.6	2.68	77	83	85	82	80

築造時期	新郭造築期	改修	基底部
修　理		文献資料	『小神野夜話』
発掘調査		その他の調査	
その他記述 1		その他記述 2	

破損現状

間詰石のヌケ

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

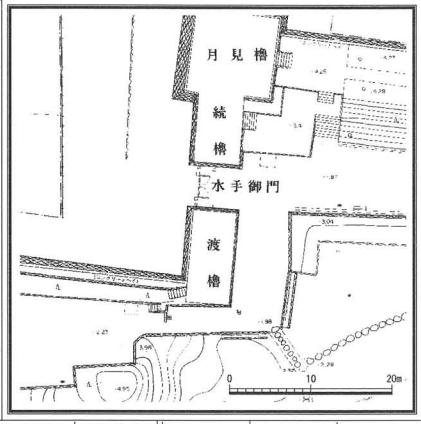
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の続櫓台の南面石垣で、水手御門の北側石垣である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角及び天端では切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。 ・石材はやや丸みのある形状で、規模は大ぶりの石材を用いている。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4039	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	門				石積工法		乱積
方　位	北				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	切石
	右隅角	出			その他特記		ソリ
上部構造物	渡櫓、水手御門				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



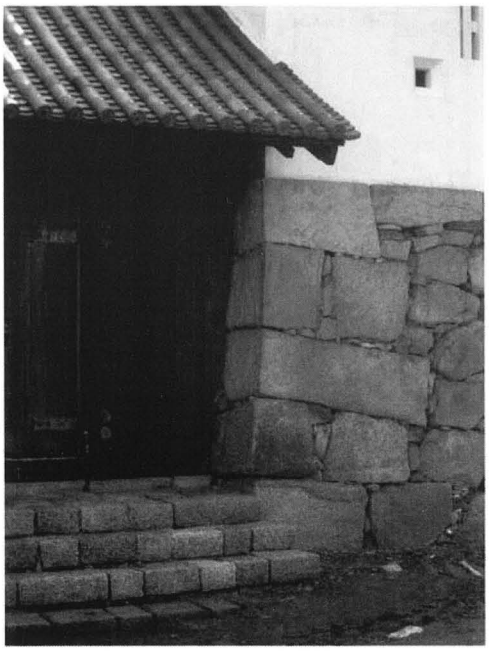
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	5.54	6.37	2.76	2.7	2.68	80	82	83	83	77

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

ノミ跡が多くみられる



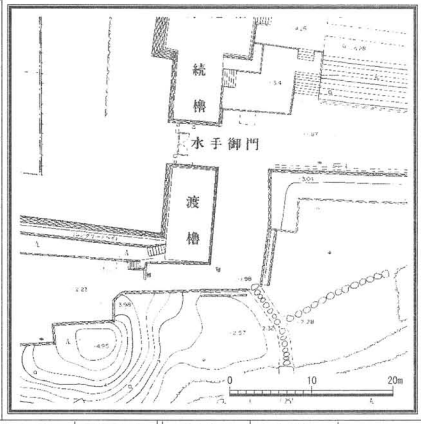
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の渡櫓台の北面石垣で、水手御門の南側石垣である。 ・高さは中央部で約2.7m、全長は天端で約5.5mである。 ・勾配は83度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角及び天端では切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形の角張ったものが多く、規模は標準的なものが多いが大ぶりの石材も見られる。 ・両隅角とも完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4040	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		打込ハギ	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	渡櫓				石材		花崗岩、安山岩(一部)	
転用石	無			刻　印			○の中に×、（、長方形	

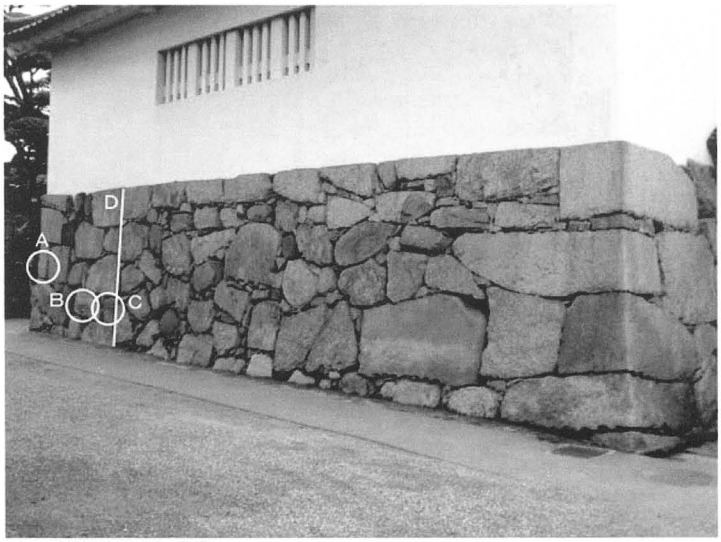


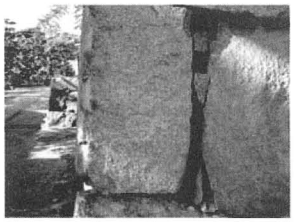
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b1	D

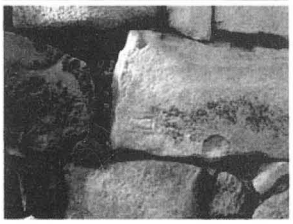
石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11.56	12.64	2.51	2.55	2.66	84	86	84	84	80

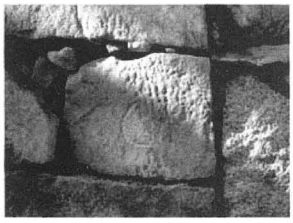
築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状









A．刻印○の中に十字
B．刻印横長の□
C．刻印○
D．目地を境に左が松平初期、右が新曲輪築造期と思われる
　　算木はやり直しか
※ノミ跡あり

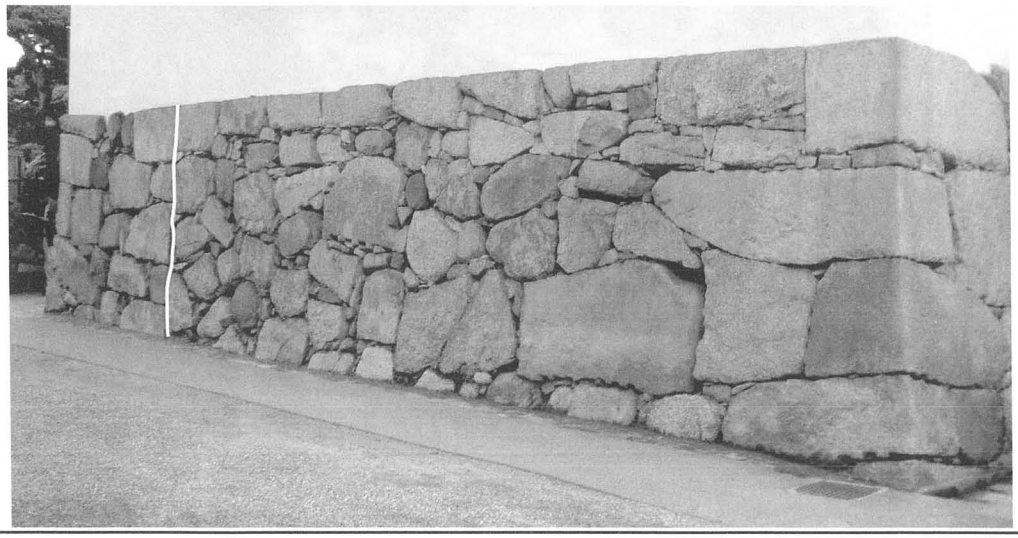
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の渡櫓台の東面内石垣である。 ・高さは中央部で約2.6m、全長は天端で約11.6mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。両隅角及び天端では切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。 ・石材は方形の角張ったものが多く、規模は大ぶりの石材が多く見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木積であるが、右隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角3石目に○の中に×、継ぎ足し前の右隅角4石目に（、継ぎ足し前の右隅角4石目左側石材に長方形が見られる。また、左隅角3石目の裏面にも○の中に×が見られる。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・左端は生駒期から所在する石垣と考えられる。 ・継ぎ足し痕跡より右は、北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。

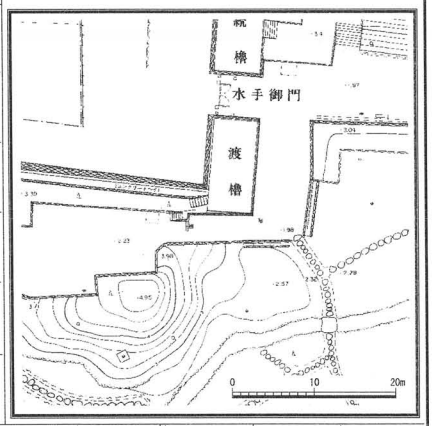
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
左隅角部近傍の縦目地	左側	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石乱積	右側石垣の継ぎ足し
	右側	花崗岩	方形割石丸み		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4041	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石	石垣位置
石垣部位	内(櫓台)				石積工法	乱積	
方　位	南				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石	
	右隅角	出			その他特記		
上部構造物	渡櫓、海手門（生駒期）				石材	花崗岩、安山岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無				刻　印	○、○の中に×	

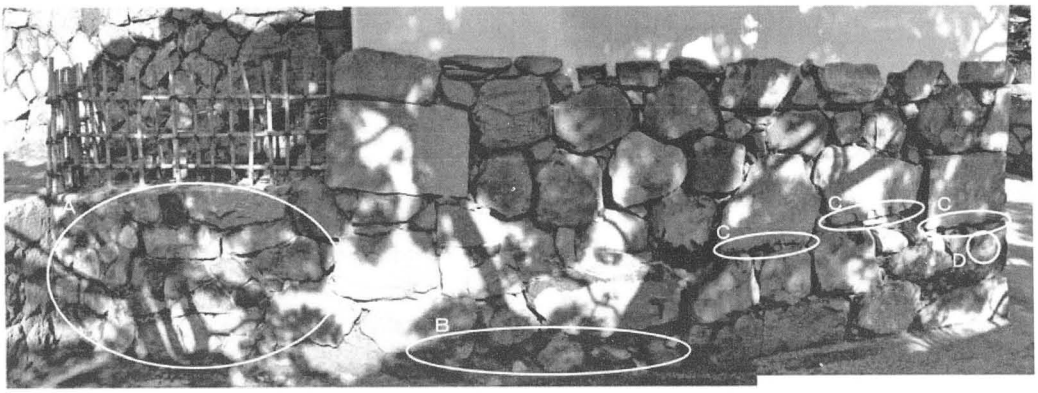


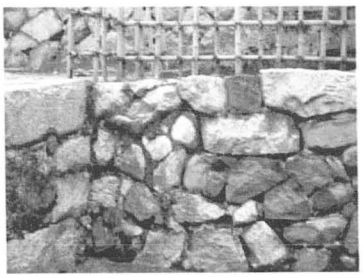
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s3			a3	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	2.24/5.46	5.71/7.85	1.23/1.37	1.29/2.3	2.5	85	80	85	85	84

築造時期	新郭造築期	改修		基底部	
修　理		文献資料	『小神野夜話』		
発掘調査	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．小石間詰石粗い
B．間詰石のヌケ
C．矢穴
D．刻印○

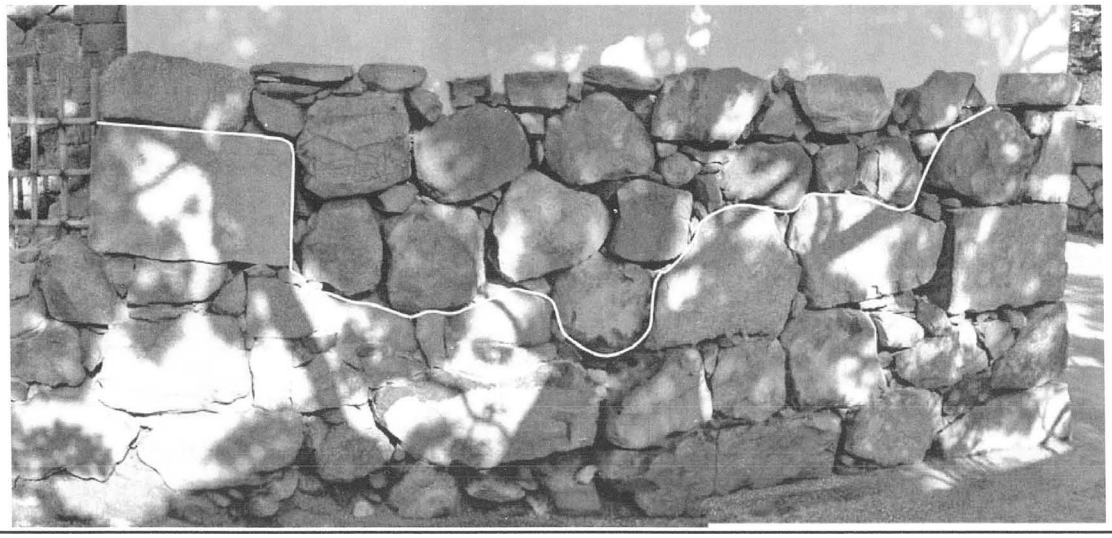
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の渡櫓台の南面内石垣である。 ・高さは櫓台部で約2.3m、袖部で約1.2mである。全長は天端で約7.7mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも切石を用いて積み上げられており、ノミ仕上げが見られる。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのある方形状のものが多く、一部長軸方向に長い角張った石材も用いられている。規模は標準的なものが多いが、大ぶりのものも見られる。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角4石目に○が見られる。また、右隅角3石目の左側面にも○の中に×が見られる。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。

目地の状況

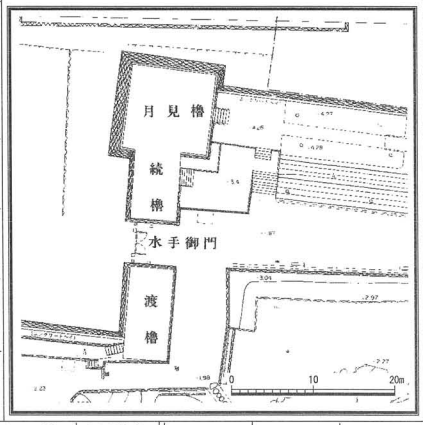
目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
両隅角部を結ぶ皿形の目地	上方	花崗岩	方形割石丸み	上方の石材がやや小ぶり	割石布積	石垣中央部の積み直し
	下方	花崗岩	方形割石丸み		割石布積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4042	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方	割石
石垣部位	内				石積工法	乱積
方　位	南				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	切石
	右隅角	出			その他特記	
上部構造物	－				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

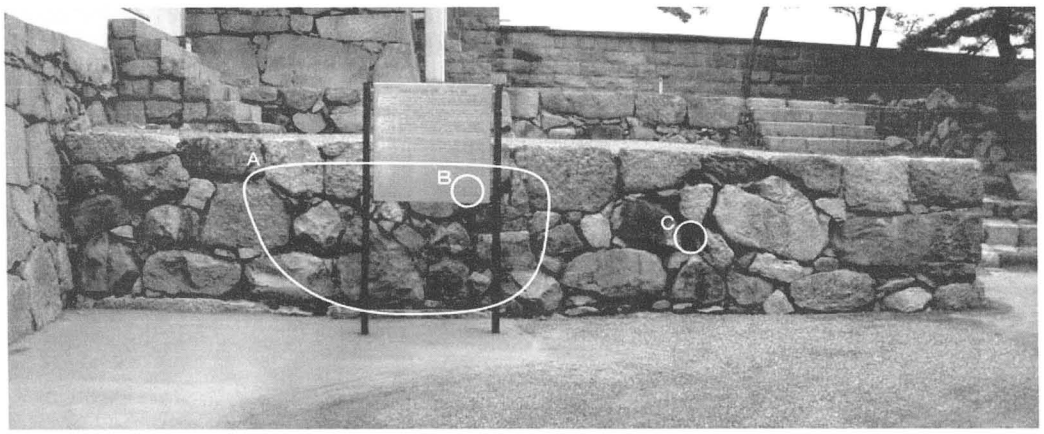


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好								s2			a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	8.61	8.41	1.6	1.48	1.38	76	83	80	85	87

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．面が不揃い
B．間詰石のズレ出し
C．間詰石のヌケ

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

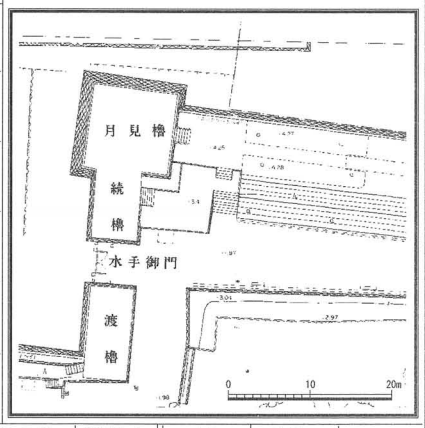
石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓台に腰巻状に取りつく南面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.5m、全長は天端で約8.6mである。 ・勾配は85度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。石垣面が不揃いである。右隅角は切石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は方形のものが多く、規模は大小混在する。 ・右隅角は完成度の高い石垣である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』に描かれており、北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。 ・昭和30年の修理前には花崗岩の谷積となっていたことが修理前の写真から判明しており、明治以降に積み直されたと考えられる。 ・現在の石垣は昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	4043	地区	北ノ丸	石垣様式	積み方		割石
石垣部位	内				石積工法		乱積
方　位	東				角石(算木)	左	切石
角の形状	左隅角	出				右	
	右隅角	入			その他特記		
上部構造物	-				石材		花崗岩
転用石	無			刻　印			無

石垣位置



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b3	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.21	2.79	1.39	1.33	0	84	89	84	86	90

築造時期	新郭造築期・明治以降	改修	有	基底部	
修　理	『重要文化財高松城二之丸月見櫓続櫓渡櫓水手御門修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

ノミ跡あり

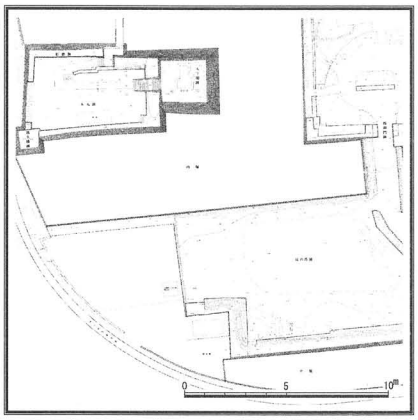
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は北ノ丸北西部の月見櫓台に腰巻状に取りつく東面内石垣である。 ・高さは中央部で約1.3m、全長は天端で約6.2mである。 ・勾配は84度とやや急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石を用いた乱積である。左隅角は切石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は方形のものが多く、規模はやや大ぶりのものとやや小ぶりのものの2種類が見られ、小ぶりのものは、右隅角近くに見られる。 ・左隅角は完成度の高い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・目地は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『旧高松御城全図』に描かれており、北ノ丸築造時に築造されたと考えられる。 ・昭和30年の修理前には花崗岩の谷積となっていたことが修理前の写真から判明しており、明治以降に積み直されたと考えられる。 ・現在の石垣は昭和30～32年の月見櫓の修理に伴い、修理されたものである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5001	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	切石、割石、野面石	石垣位置
石垣部位	外(内堀に面する)				石積工法	谷積、乱積	
方　位	北				角石(算木) 左		
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右		
	右隅角	入(埋没)			その他特記		
上部構造物	-				石材	花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印		無	

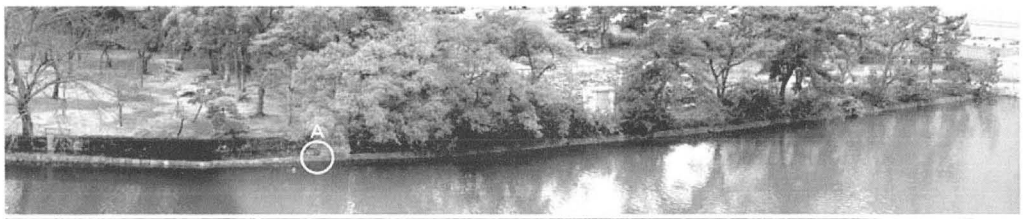


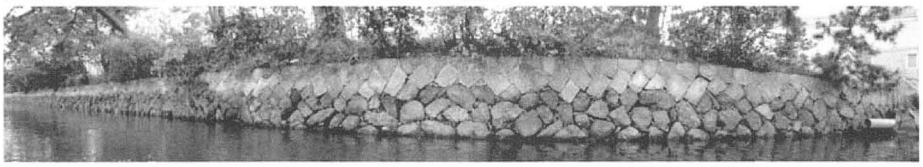
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2							有	a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	155.9	155.9	1.93	1.93	1.58	81	85	80	75	90

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状





A．ハラミ
B．土管の下大きな石
※上２石積み直し谷積、その下２石も時代異なるが谷積、目地モルタル詰め

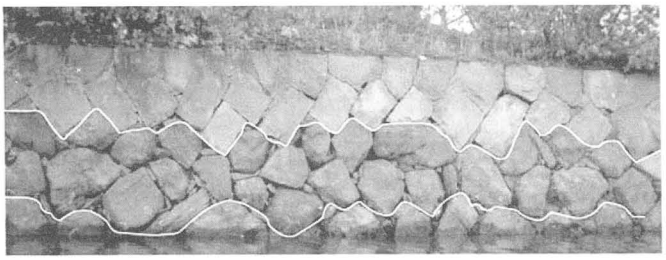
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

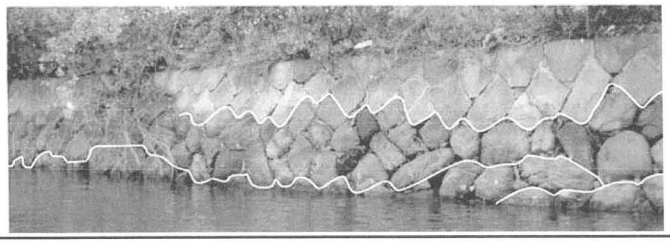
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場北側の北面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約1.9m、全長は天端で約156mである。 ・勾配は75度から垂直まで場所によって異なる。
積み方石材等	・石の積み方は上部2段が花崗岩の切石を用いた谷積であり、その下部2段は花崗岩、安山岩の切石、割石、野面石を用いた谷積である。上部4段より下部については、花崗岩、安山岩の野面石を用いて積み上げられている。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形のものが多く、規模はやや小ぶりのものが多い。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中央部に薄いハラミが見られる。 ・一部間詰にモルタルが塗り込められている。
石垣の変遷	・上部4段が積み直されており、その下部に土管が埋けられていることから、明治以降に少なくとも2度の積み直しが行われている。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
天端から2石下の横目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石谷積	異なる石積工法による積み直し
	下方	花崗岩	方形割石丸み		割石谷積	
天端から4石下の横目地	上方	花崗岩	方形割石丸み	ほぼ同規模	割石谷積	異なる石積工法による積み直し
	下方	花崗岩	割石丸み		割石乱積	

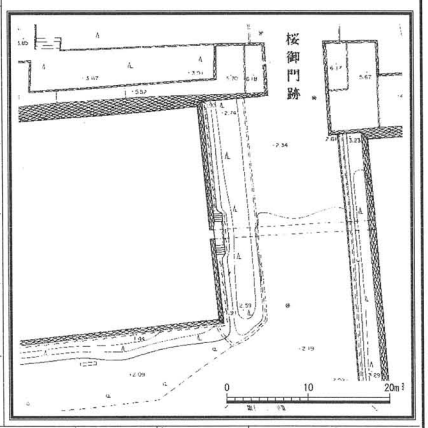




史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5002	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方	割石、野面石
石垣部位	土橋(内堀に面する)				石積工法	乱積
方　位	西				角石(算木) 左	
角の形状	左隅角	入			角石(算木) 右	
	右隅角	入			その他特記	
上部構造物	-				石材	花崗岩
転用石	無			刻　印		無

石垣位置

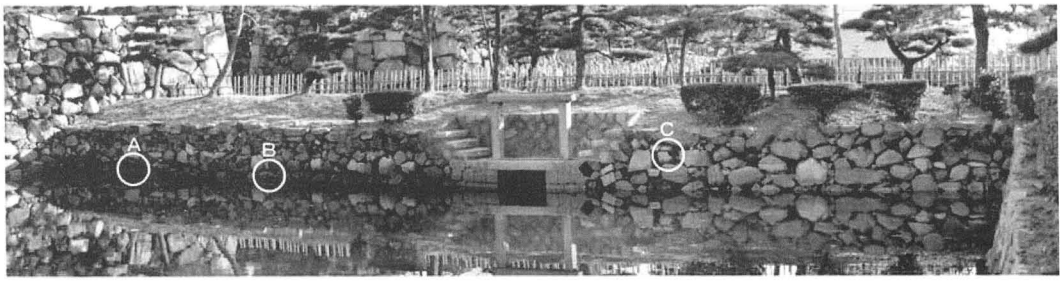


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		s3	s2						s2			a2	b2	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	27.47	15/10	1.78	2.22	1.92	76	82	77	82	81

築造時期	生駒期	改修	有	基底部
修　理		文献資料		
発掘調査		その他の調査		
その他記述 1		その他記述 2		

破損現状



A．ズレ出し
B．ヌケ
C．間詰石のヌケ

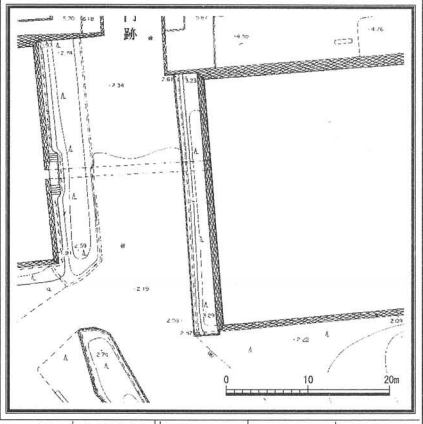
備　考		調査年月日	平成16年12月 8日

石垣項目別カルテ	
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場と三ノ丸をつなぐ土橋の西面石垣で、内堀に面する。 ・高さは中央部で約2.2m、全長は天端で約24.5mである。 ・勾配は77度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石と野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形の角張ったものや角が取れて丸みのあるもの、やや扁平のもの等混在する。規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、右側ではより大ぶりのものが目立つ。 ・中央部に内堀と中堀をつなぐ通水口が設けられている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・石垣中段に石材のズレが見られる。また、下段に欠損が見られる他、間詰石のヌケも散見される。
石垣の変遷	・通水口部分の積み直しが考えられる。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5003	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石、野面石	石垣位置
石垣部位	土橋(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	入				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
	良好											a3	b2	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	32.05	30.25	3.27	3.41	3.08	84	79	70	76	80

築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部	
修　理		文献資料	『高松城下図屏風』『旧高松御城全図』		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．改修部（切石谷積）
※割石多いが、一部野面もみられる

備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

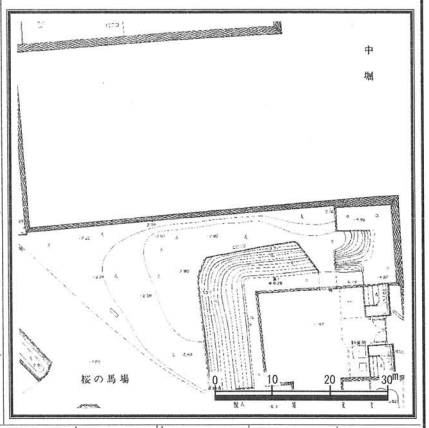
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場と三ノ丸をつなぐ土橋の東面石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央部で約3.4m、全長は天端で約32.1mである。 ・勾配は70度とやや緩やかである。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の割石と野面石を用いた乱積である。両隅角とも入隅である。 ・石材は方形の角張ったものや角が取れて丸みのあるもの、やや扁平のもの等混在する。規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・中央部に内堀と中堀をつなぐ通水口が設けられている。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・破損は見られず、良好な状態である。
石垣の変遷	・『高松城下図屏風』では石垣北端が東側へ張り出して描かれており、『旧高松御城全図』では現状と同じように描かれており、『小神野夜話』等の記載から、新郭造築期の積み直しの可能性が考えられる。 ・通水口部分の積み直しが考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
通水口上方の皿形目地	上方	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石谷積	積み直し
	下方	花崗岩	方形割石		割石乱積	

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5004	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		野面石、割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	北				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩、凝灰岩(一部)	
転用石	無			刻　印			無	

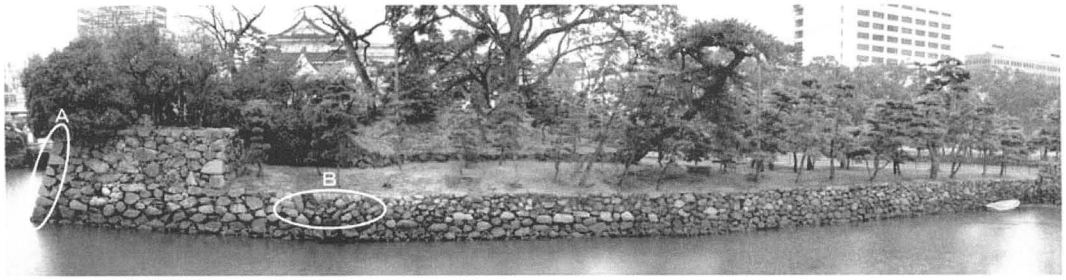


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s4						s34			a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.41/53.52	64	5.41	2.27	2.21	72	80	79/70	80/78	79/78

築造時期	生駒期	改修	有	基底部	地山(現在は一部コンクリート)
修　理	昭和48年度(右寄り2箇所) 『史跡高松城跡保存修理報告書』	文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．間詰石ほとんどなく、非常に不安定
B．土管に伴う谷積

間詰石が欠損し、築石の控えも短いため、石材が浮いた状態となっている。

算木積み未完成。
上部は切石、下部は野面

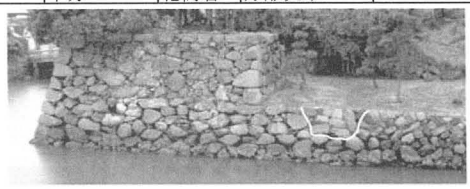
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場北東部の北面石垣で、中堀に面する。 ・高さは中央部で約2.3m、全長は天端で約62.9mである。 ・勾配は70～80度の範囲で変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石を用いた乱積であるが、部分的に割石を用いた谷積が見られる。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石垣下部では下1石を前へ持ち出して積むアゴ止め石が見られる。 ・石材は方形の角が取れて丸みのあるものが多く見られる。規模は40～50cm程度の標準的なものが多いが、より小ぶりのものも見られる。 ・左隅角は完成度の低い算木隅である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・左隅角は隅角石の合端が噛み合っておらず、間詰石も抜け落ち、非常に不安定な状態である。 ・築石部は土管埋設等の改変が見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・数ヶ所の目地が見られ積み直しがあったと考えられる。 ・昭和48年度に右寄り2箇所が修理されている。 ・修理に際してコンクリート基礎、栗石敷、松丸太杭打設により補強している。

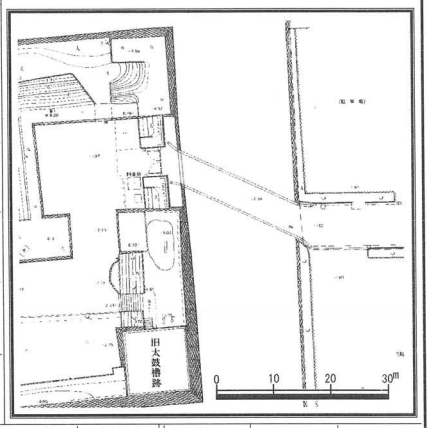
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角部近傍の谷形目地	上方	花崗岩	方形割石	内形石材が小ぶり	割石乱積	谷形部の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
右中間の谷形目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	谷形部の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
右中間の縦目地	左側	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	築造時の偶発的なもの
	右側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
中央部の谷形目地	上方	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	谷形部の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左中間の谷形目地	上方	花崗岩	方形丸み	ほぼ同規模	野面石乱積	排水管設置による積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5005	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		野面石、割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		乱積	
方　位	東				角石(算木)	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	太鼓櫓、多聞櫓、旭橋				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	



破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s4						s34			a1	b1	A

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	11/20/15/13.18	65	6.73	1.9	5.15	68/76	80	82	75	72

築造時期	生駒期・新郭造築期	改修	有	基底部	胴木？
修　理	昭和40～42年（一部積み足し）『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』『旧高松御城全図』		
発掘調査	昭和47年12月（旭橋北側石垣基礎部）	その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状

A．カケ落ち
B．昭和42年拡張ライン
C．切石少々ユルミ
D．旭門に伴う積み直し
E．間詰石が大半抜けて浮いたようにみえる状態
F．野面積(算木未完成)

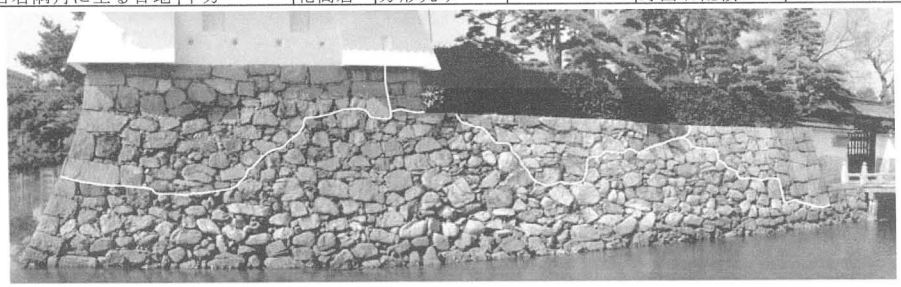
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日

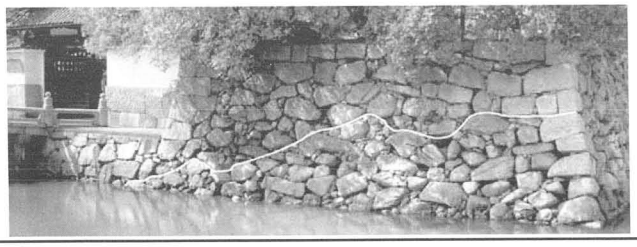
石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場東部の東面石垣で、中堀に面する。 ・高さは右端で約5.2m、中央の旭橋付近で約1.9m、左側の旧太鼓櫓台付近で約6.7mである。全長は天端で約59.7mである。 ・勾配は75～82度の範囲で変化する。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩の野面石を用いた乱積であるが、部分的に割石を用いた乱積が見られる。左隅角はノミ仕上げが見られる切石を用いて積み上げられている。右隅角は割石を用いて積み上げられている。 ・石垣下部では下1石を前へ持ち出して積むアゴ止め石が見られる。 ・石材は野面石では丸みのある不定形のものが用いられ、割石では方形の角が取れて丸みのあるものややや扁平のものなどが多く見られる。規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・左隅角及び門開口部の隅角は完成度の高い算木積であるが、右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。 ・昭和47年の試掘によると石垣北部の根石部分で胴木が検出されているが、詳細は不明である。
破損状況	・右隅角下部の石材が大きくズレ、合端が合わなくなっており、かなり不安定な状態である。これに伴って、周辺の築石にもズレが見られる。 ・その他築石部分は間詰石のヌケが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・新郭造築期の門開口に伴い、積み直しがあったと考えられる。 ・旧太鼓櫓台部分の右端は昭和42年の艮櫓移築に伴って積み足されたものである。

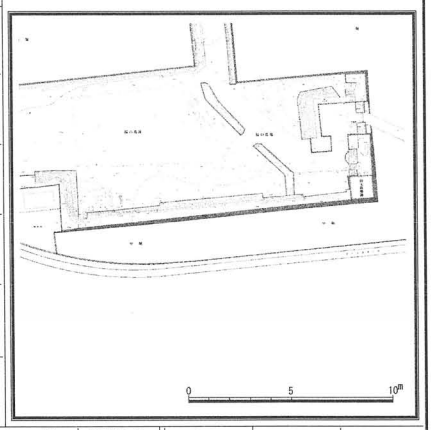
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角中段から左下がりで下部に至る目地	上方	花崗岩	方形割石	下方の石材はやや小ぶり	割石布積	門開口時の積み直し
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
門開口部から左上がりに天端に至る目地	左側	花崗岩	方形丸み	左側の石材はやや小ぶり	野面石乱積	門開口時の積み直し
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	
左中間天端から櫓台右隅角に至る谷形目地	谷形中側	花崗岩	方形割石	やや小ぶり	割石布積	中側の積み直し
	谷形外側	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
櫓台右隅角の縦目地	左側	花崗岩	方形切石	ほぼ同規模	切石布積	櫓移築のための石垣積み足し
	右側	花崗岩	方形切石		切石布積	
左隅角中段から右上がりに櫓台右隅角に至る目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石乱積	積み直しか築造時のもの
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	





史跡高松城跡　石垣調査

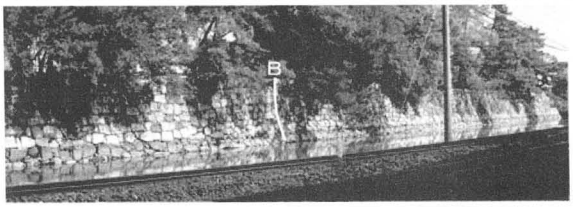
石垣番号	5006	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	外(中堀に面する)				石積工法		布積、乱積	
方　位	南				角石(算木)	左		
角の形状	左隅角	出				右	切石	
	右隅角	入			その他特記		ソリ	
上部構造物	太鼓櫓、塀				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			無	

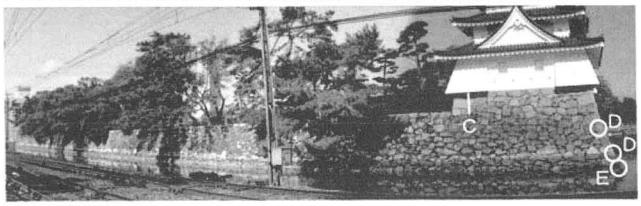
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
					s4							a2	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	3.5/145/11	159.5	5.88	5.48	5.86	81/84	83	80	61	63

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理	昭和40～42年（一部積み足し）『重要文化財高松城旧東之丸艮櫓移築修理工事報告書』	文献資料	『小神野夜話』、明治期写真		
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．上割石の布積、下野面（生駒期？）
B．左布積、右乱積
C．櫓の移築に伴う積み足し部分
　途中積み替えラインらしきもの数本あり
D．ワレ
E．下欠け落ち？

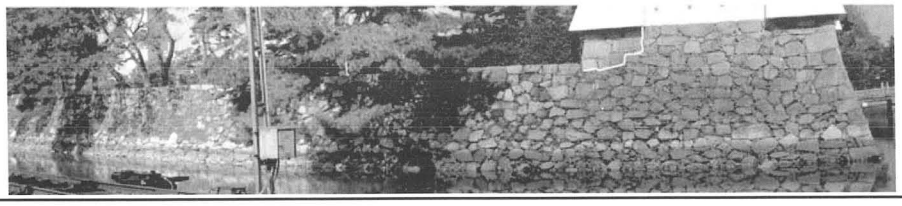
備　考		調査年月日	平成16年12月 9日 平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

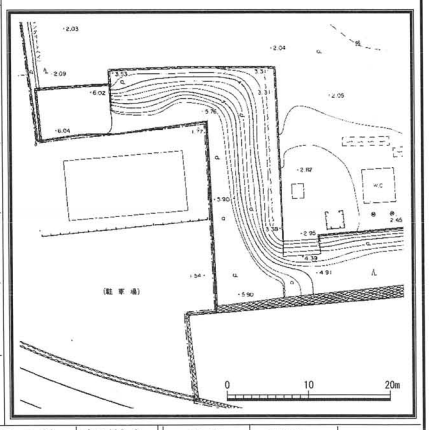
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南部の南面石垣で、中堀に面する。 ・高さは右端の旧太鼓櫓台付近で約5.9m、他は約5.5～5.9mである。全長は天端で約159.5mである。 ・勾配は旧太鼓櫓付近が61度とかなり緩やかである。左の桝形付近では83度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は右半では花崗岩の野面石、割石を用いた乱積であるが、左半は花崗岩の割石を用いた布積である。その積み方、加工精度は左ほど丁寧である。また、水面より下は野面石の乱積である。右隅角はノミ仕上げが見られる切石を用いて積み上げられている。左隅角は明治以降の埋め立てにより不明であるが、現状は入隅となっている。 ・石垣下部では下1石を前へ持ち出して積むアゴ止め石が見られる。 ・石材は野面石では丸みのある不定形なものが用いられ、割石では方形の角が取れて丸みのあるものや、やや扁平のもの、方形の角があるもの等が見られる。規模は40～50cm程度の標準的なものが多い。 ・右隅角は完成度の高い算木積であるが、桝形部分は完成度の低い算木積である。 ・転用石、刻印は見られない。
破損状況	・ワレが見られるが、概ね良好な状態である。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・水面を境に上下で積み方が異なることから積み直しの可能性が考えられる。 ・築石部の中にも積み方の異なる部分が見られることから積み直しの可能性が考えられる。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
櫓台左隅角の縦目地	左側	花崗岩	方形切石	左側石材がやや大ぶり	切石布積	櫓移築のための石垣積み足し
	右側	花崗岩	方形割石		割石布積	
左隅角から中央部に至る石垣下部の横目地	上方	花崗岩	方形割石	ほぼ同規模	割石布積	上方部の積み直しか築造時のもの
	下方	花崗岩	方形丸み		野面石乱積	
左隅角から中央部に至る石垣上部、中段の横目地	上部、中段面	花崗岩	割石	ほぼ同規模	割石布積	布積



史跡高松城跡　石垣調査

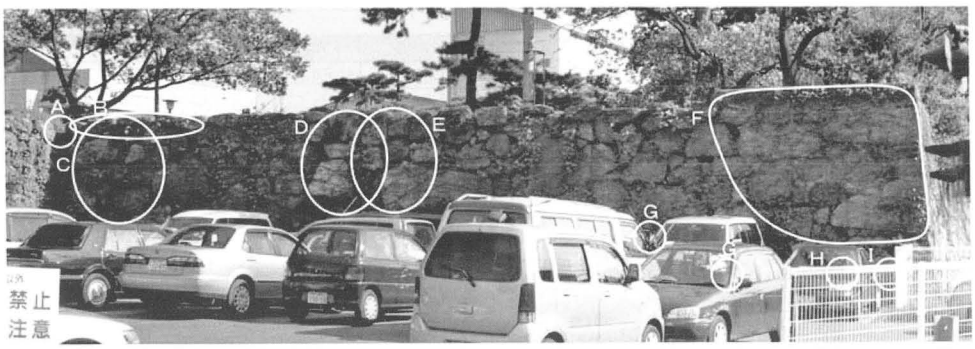
石垣番号	5007	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	桝形				石積工法		乱積	
方　位	西				角石（算木）	左		
角の形状	左隅角	入				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	塀				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	無			刻　印			○、×	

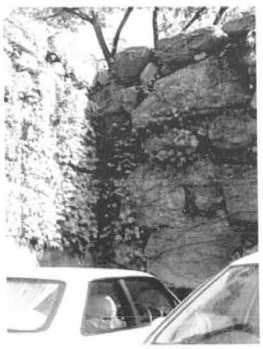
破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s1	s2	s2				s1		有	a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	22.95	23.1	4.29	4.23	4.48	90	87	80	85	84

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状





A．欠け
B．ズレ
C．うすくハラミ
D．ハラミ
E．大石ズレ出し、その下間詰石ヌケ
F．間詰石のヌケ（上部に多い）、全面目地にモルタル
G．ワレ
H．最下石ズレ出し
I．間詰石のヌケ

備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

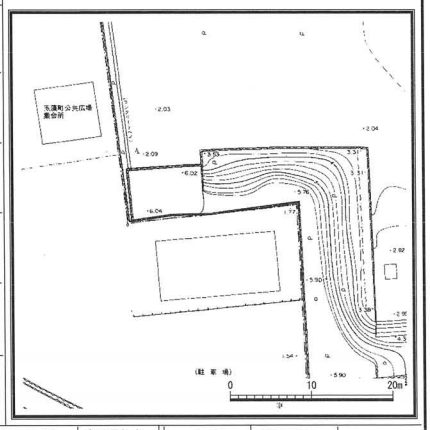
位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の旧大手の西面石垣である。 ・高さは中央部で約4.2m、全長は天端で約23.0mである。 ・勾配は80度と平均的である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。右隅角は割石を用いて積み上げられている。左隅角は入隅である。 ・石材は丸みのあるものが多く見られる。規模は大石材が多く用いられている。 ・右隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は天端中央部の石材に○・×が見られる。城内の他の刻印に比べ大きい。
破損状況	・中段にハラミが見られる他、左隅角上部にズレが見られる。 ・モルタルによる目地の補強が全面にわたって行われている。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・門として機能していた時期は新郭造築期までである。

目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角近傍の横目地	右隅角近傍全面	花崗岩	方形割石丸み	大小石材混在	割石布積	布積

史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5008	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	桝形				石積工法		乱積	
方　位	南				角石（算木）	左	切石	
角の形状	左隅角	出				右		
	右隅角	入			その他特記			
上部構造物	（古）太鼓門、塀				石材		花崗岩、安山岩	
転用石	穴があいた左角の天端石			刻　印			○、×	

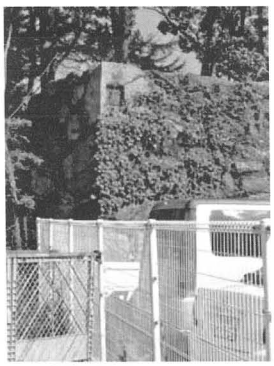


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
			s2						s1		有	a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	20.71	20.56	4.22	4.35	4.28	88	86	88	85	90

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．刳抜き部

A．転用石か？
B．ハラミ
C．間詰石のヌケ、栗石がみえるその上の石がズレ
D．間詰石のヌケ
E．ズレ出し
※全体モルタル詰め、上部は小振りの石、下部は大石

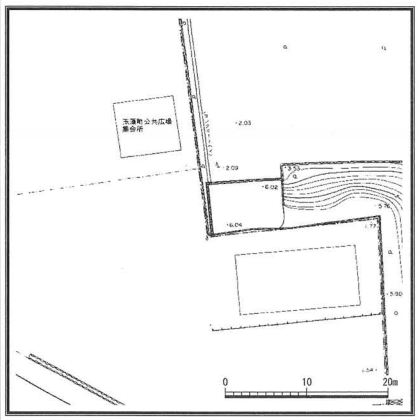
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の旧大手の南面石垣である。 ・高さは中央部で約4.4m、全長は天端で約20.7mである。 ・勾配は88度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は花崗岩、安山岩の割石を用いた乱積である。左隅角は割石を用いて積み上げられている。右隅角は入隅である。 ・石材は丸みのあるものが多く見られる。規模は大石材が多く用いられているが、天端付近では小石材も使われている。 ・左隅角は完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は右隅角から約3m左の最下段の石材に○・×、右隅角から約5m左の中段の石材に○・×が見られる。 ・左隅角上部に門の桁を受けたような正方形の穴が見られる。
破損状況	・中段にズレが見られる。 ・モルタルによる目地の補強が全面にわたって行われている。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・門として機能していた時期は新郭造築期までである。

目地の状況	

史跡高松城跡　石垣調査

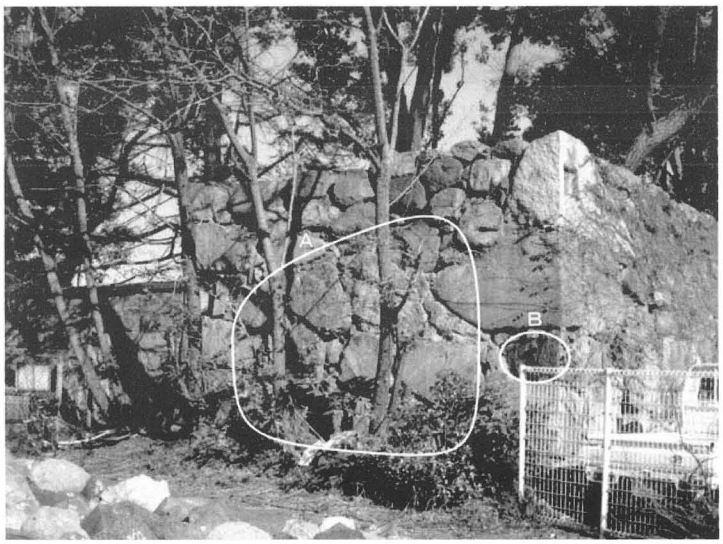
石垣番号	5009	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	門				石積工法		乱積	
方　位	西				角石(算木)	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	(古)太鼓門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			○の中に×、分銅形	

破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
				s2			n2				有	a2	b1	B

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	6.24	6.34	3.85	3.31	4.08	90	90	81	85	88

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．うすいハラミ
B．少し引っ込む
※目地モルタル詰め

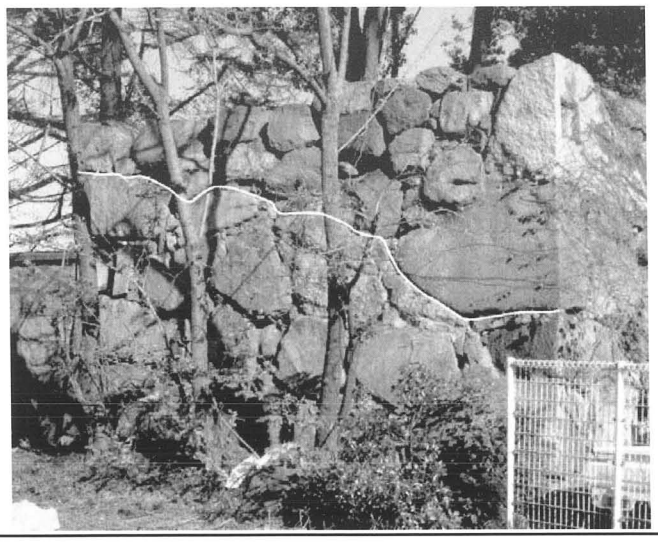
備　考		調査年月日	平成16年12月17日

石垣項目別カルテ

位置・規模等	・本石垣は桜ノ馬場南西部の内石垣の北面石垣である。 ・高さは中央部で約3.7m、全長は天端で約9.4mである。 ・勾配は90度と急である。
積み方石材等	・石の積み方は、花崗岩の割石を用いた乱積である。両隅角とも割石を用いて積み上げられている。 ・石材は丸みのあるものが多く見られる。規模は40～50cm程度の標準的なものが用いられているが、より大ぶりなものも用いられている。 ・両隅角とも完成度の低い算木積である。 ・転用石は見られない。 ・刻印は左隅角1石目に○の中に×、左隅角3石目右側石材に分銅形が見られる。左隅角1石目のものは、城内の他の刻印に比べ大きい。
破損状況	・間詰石のヌケが多く見られ、栗石が見えるほど深く抜けているところもある。 ・現状では安定しているものの、変形を起こしやすい状態にある。
石垣の変遷	・生駒期から所在したと考えられる。 ・門として機能していた時期は新郭造築期までである。

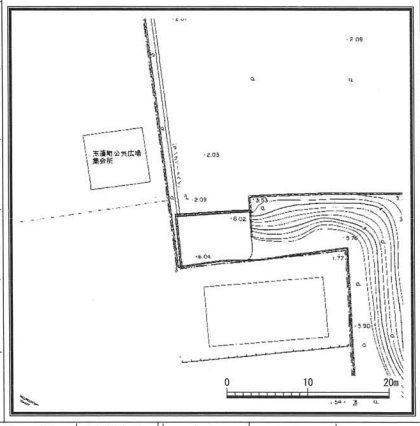
目地の状況

目地の位置、状況	目地の両側	石材種類	石材形状	石材規模	積み方	目地の発生事由
右隅角中段から左上がりに左隅角上部に至る目地	上方	花崗岩	割石丸み	上方石材がやや小ぶり	割石乱積	上方部の積み直し
	下方	花崗岩	割石丸み		割石乱積	



史跡高松城跡　石垣調査

石垣番号	5010	地区	桜ノ馬場	石垣様式	積み方		割石	石垣位置
石垣部位	内（桝形）				石積工法		乱積	
方　位	北				角石（算木）	左	割石	
角の形状	左隅角	出				右	割石	
	右隅角	出			その他特記			
上部構造物	（古）太鼓門				石材		花崗岩	
転用石	無			刻　印			○、×	

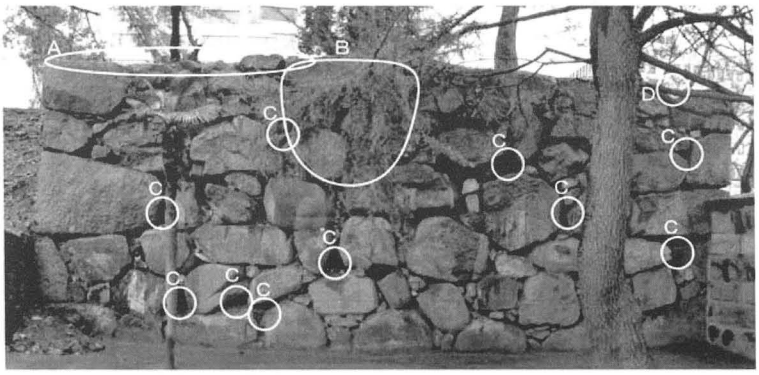


破損状況と破損要因	良好	欠損	ズレ	ハラミ	ワレ	欠け剥離	陥没	崩落	間詰のヌケ	その他焼損等	軽微な改変	破損状態	影響の程度	危険度
		n1		s1					s2			a2	b1	D

石垣規模	天端長	基底部長	左端高	中央高	右端高	左角勾配	左端勾配	中央勾配	右端勾配	右角勾配
	9.42	9.31	3.27	3.69	3.6	86	88	90	-1	-

築造時期	生駒期	改修		基底部	
修　理		文献資料			
発掘調査		その他の調査			
その他記述 1		その他記述 2			

破損現状



A．わずかに天端ライン揃わず
B．わずかなハラミ
C．間詰石のヌケ（裏栗石みえる）
D．欠損（間詰石？）

備　考	右角勾配コンクリート塀により測定不可	調査年月日	平成16年12月 9日